

第四節

散木奇歌集と万葉集の本歌取一覽

(2)

さ
ま
の
よ
も
今
も
こ
ん
よ
の
身
の
程
も
け
ふ
の
さ
ま

恨躬耻運雑歌百首

(1)

る
虫
と
な
ら
ば
や
(第一春部正月)

お
し
み
か
ね
我
も
散
な
ば
こ
ん
世
に
も
花
に
む
つ
る

よませ侍けるによめる

修理大夫頭季六條の家にて櫻の歌十首人々に

(一) 万葉集全休を本歌とした歌

(※右が散木奇歌集左が万葉集)

(3)

にマ思ひしる哉 (オ九・雑部)

○今の代にし楽しくあらばこむ世には虫にも

鳥にも吾はなりなむ (巻オ三・大宰帥大伴郷)

三月音人のかりいつかはしける

君がため弥生になればよづまさへあべのいち

ぢにははつこつむなり (オ一春部三月)

○焼津辺にわが行きしかば駿河なる阿倍の市

道に逢ひし見らばも (巻三・春日蔵首老)

○わが門に千鳥しはなく起きよ起きよわが一

夜づま人にしらゆな (巻十六・山上憶良)

(4)

待郭公

時鳥まつらさよ姫たちゐしまひれふる里にこ

急なをしみそ (オニ夏部五月)

○松浦がたさよ姫の子がひれふりし山の名の

みやき、つゝ居らむ (巻五・山上憶良)

月のいらんとするをみまよめる

(5)

月みればすくなみ神ぞうらめしき西には山を

つくらざりせば (オニ秋部九月)

○大穴牟遲少御神の作らしし妹背の山はみら

くしよしも (巻七・人麿歌集)

待郭公

(6)

なきをくれこちこせ山の郭公きなせの里の松

のたえまに (ヤニ夏部五月)

○唐衣着奈良の里のつまつ松に玉をしつけむ好

き人もかも (巻六・笠朝臣金村)

○わが背子と此方臣勢山と人は云へど君も来

ますず山の石にあらし (巻七・作者不詳)

百首歌中に泉をよめる

(7)

さらし井のこのしたかげに行ふれば衣手さむ

し蟬はなけども (ヤニ夏部六月) (堀河百首)

と
顧みるべき(巻九・雑歌)
(堀河百首)

いぐしとりこえまかに岩がねのこりしく山

百首歌中に山

らむとしつくりえに(オニ夏部骨)
(堀河百首)

初苗にうずのたままをとりそへまいぐしまつ

百首歌中に早苗

りたる(巻十・冬雑歌)

〇タされば衣手寒し高松の山の木毎に雪ぞふ

に妻もが(巻九・作者不詳)

〇三粟の中に向へる曝井の絶えず通はむそこ

(12)

もがみ川せぜの岩河わきかへり
みくまの

長歌

恋ひかさぬらむ (ヤセ・恋部上)

(11)

みくまのはま夕暮になる程は
いへか人を

夕べの恋

よいくへなりとも (ヤニ・夏部五月)

(10)

みくまのはまゆふかけり時鳥鳴く音かさね

殿下に夕晚圃郭公といへることをよめる

玉かげみれば羨しも (巻十三 雑歌)

おいぐしたま神酒すえまつる神主部のうずの

(14)

朝夕になぞつつおおぼすふすしめ萱としかへま君がみ

百首歌中にかるかやをよめる

しめま河百首

にぬいあへむかも(卷十、七夕九十八首の中)

の足玉も手玉もゆらに織るはたと君がみけし

今宵しもなく(テ三、秋部七月)

(13)

彦星のみけしのあやを急ぐとやはた織る虫の

人のもとにマ七月七日とよめる

に逢はぬかも(卷四、柿本人麿)

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直浦のはまゆふかさねつ(卷十、雑部下)(堀河百首)

まくさにしつ （せむ（全百首））（才三 秋部 八月）（堀河百首）

○ニの岡に草刈る小子然な刈りそね君がきま

さば御馬草にせむ （卷七・柿本人麿歌集）

氷満池上といへるを

(15) 今日よりはみはらの池につらゝるまあぢのむ

ら鳥隙求むらむ （才四・冬部十二月）

○天降りつく！鴨専呼ばひ辺づ方にあぢむら

騷ぎももしきの！ （卷三・柿本人麿）

○あぢ群のとよる海に船浮けま白玉とると

人に知らゆな （卷七・柿本人麿歌集）

(16)

江はらうしろといふあそびのみすめ

とめよとしろくいへとも折ふしのあしあけに

ても過しつる哉 (才六・悲嘆部)

の湊入の葦別小舟障多みわが思ふ君に逢はぬ

頃かも (卷十一・作者不詳)

衾をよめる

(17)

君こばとははふの小屋の床の上にあさぞ小衾

ひきてこそとれ (才四冬部十二月) (次郎百首)

の庭にたつ麻布小衾今夜はに夫寄せにせぬ麻

布小衾 (卷十四・作者不詳)

(18)

○庭にたつ麻手刈り干ししきしのぶ東女を忘

れたまふな (巻四・常陸娘子)

○をちかたの赤土の小屋に小雨降り床さへぬ

れぬみにそへ我妹 (巻上・作者不詳)

身相神通楽

天とぶや軽の社に身となしていはひし槻のさ

かえてぞみる (才六・釈教部)

○天とぶや軽の社の斎槻幾世まであらむ隠事

(20)

○	ど	あ
湊	さ	し
入	は	ま
の	り	行
あ	が	く
し	ち	棚
わ	な	な
け	り	し
小	(オ	小
舟	七	舟
障	・	人
多	恋	し
み	部	れ
吾	上	ず
念)	こ
ふ		が
君		る
に		と
あ		す
は		れ

人のがうつかはしける

へり来まぞに (巻二十 若績部諸人)

○	こ
庭	し
中	ば
の	さ
阿	す
須	と
波	も
の	(オ
神	六
に	・
木	神
柴	祇
さ)
し	
吾	
は	
斎	
は	
む	
か	

(19)

今
更
に
妹
か
へ
さ
め
や
い
ち
じ
る
ま
あ
す
は
の
宮
に

悔離別といへる事とよめる

ぞも (巻十一 寄物陳思)

ぬ頃かも
(巻土・寄物陳思)

夏恋

(21)

あふことは夏野に茂る恋草の刈りはらへども

生ひむせびつゝ
(才七・恋部上)

の吾背子にあが恋ふらくは夏草の刈り除くれ

ども生ひしく如し
(巻土・寄物陳思)

おとこかれかれになりてなげきける人にあはりて
つかはしける

(22)

通ひこしまののつぎはしほどくにととたえ

ぬべき身といかにせん
(才七・恋部上)

。足の音せずゆかむ駒もがかつしかの真間の

(24)

ほととぎす鳴くぬにかげしうつらぬば鏡の山

堀河院の御時二間にて殿上のおのこども歌つかまつりけるによめる

給ふな

(巻四・常陸娘子)

の庭に立つ麻で刈りほし布さらす東女と忘れ

すぐす頃かな

(才七・恋部上)

あさぞほす東こ女のかやむしろしき忍びても

(23)

忍びたる恋

が夢にしみゆる

(巻四・吹黄刀自)

のまぬの浦のよどのつぎはし心ゆも思へや妹

つぎほしやまず通はむ (巻十四 東歌)

も
か
し
な
か
り
け
り

(オニ・夏部五月)

修理大夫顯季の八條の家にて
人々恋の歌よみけるに

(25)

山鳥のはつさの鏡かげふれて影さだにみぬ人

ぞ恋しき

(オセ・恋部上)

山鳥の尾ろの初麻に鏡かけ唱子べみこそ汝

に寄りけめ

(巻十四・相南)

修理大夫顯季の八條の家にて
くれどもあはずし

(26)

心えつ真野の萱原ふみからしくるもしるしの

なき身なりけり

(オハ・恋部下)

道の辺の草を冬野にふみからし吾立ち待つ

塩津山うち越えゆけばあがのれる馬がつか
 はしとなるらむ
 (オハ・恋部下)
 をくれとマそふる心や道すがら駒のつまづく

思夫

菅島の夏身の浦に寄する波向も置きまわが
 思はなくに
 (オハ・寄物陳思)
 うらみまぞゆく
 (オハ・恋部下)

人をぬかる恋といへる事を
 我を君心のまゝにすがしまのことなつみの
 と妹につげこそ
 (巻上 寄物陳思)

(30)

はねかづら赤裳の裾にくりためはなふく妹

人を見てこふ

とる瀬に立たずらし (巻七・大伴家持)

をがみ河くれなゐにほふ少女らしあしつき

つきもせなが為とぞ (オハ・恋部下)

(29)

をがみ河ぬじろたかかやふみしだきとるあし

追従恋 (中納言俊忠が家にて)

家恋ふらしも (巻七・作者不詳)

妹が門いでいる河の瀬を早み駒ぞつまづく

づく家恋ふらしも (巻三 笠 金村)

(32)

968

朝夕に
つたふ板田の橋なれば
榊さへ絶えたる

橋

の上吾が枕かむ
(卷五・大伴淡等)

○いかにあらむ
日の時にかも声知らむ
人の膝

ならましもの
(ヤ九 雑部)

(31)

身にかへて
いく人あらば
膝にふす玉の小琴と

恨躬耻運雑歌
(百首の中)

妹がここだ恋いたる
(卷四・相聞)

○はねかづら
今する妹はなかりしを
いかなる

に触れずば
やまじ
(オハ 恋部下)

(34)

い
く
さ
く
さ
の
か
ふ
心
や
つ
き
ぬ
ら
む
今
の
ほ
り
道

草
香

何
か
嘆
か
む

(卷十 柿本人麿歌集)

○ 秋
山
の
し
た
じ
が
下
に
鳴
く
鳥
の
声
だ
に
聞
か
ば

に
さ
と
し
か
な
く
も
(才九 雑)

(33)

あ
が
如
く
世
に
す
み
わ
い
て
秋
山
の
し
た
じ
が
し
た

恨
躬
耻
運
雑
歌
(百首の中)

お
な
恋
ひ
そ
吾
妹
(卷十 寄物 陳思)

○ 小
壑
田
の
板
田
の
橋
の
こ
ぼ
れ
な
ば
榊
よ
り
行
か

ぢ
ろ
お
に
け
り
(才九 雑部)
(堀河百首)

石ふまずとて (次郎百首)

○信濃道は今の聖道刈株に足踏ましなむ履は

けわが背 (卷十四・東歌)

神祇伯顯仲家々逐日増恋といへる事

日をへつゝあくらの浜の忘貝ぬすれはてぬと

みるぞ悲しき (才ハ恋部下)

○紀の国の飽等の浜の忘貝ぬれは忘れじ年は

経ぬとも (卷土・寄物陳思)

田上にてささふの山にのほりてあそびけるにまゆみの

もみぢを見てもよめる

も
つ
づ
ま
の
い
そ
し
の
さ
ふ
時
雨
し
ま
つ
ひ
こ

ま
ゆ
み
紅
葉
し
に
け
り
一
才
四
・
冬
部
十
月

葛
城
の
襲
津
彦
真
弓
荒
木
に
も
憑
め
や
君
が
わ
が

名
告
り
け
む

(巻
上
・
寄
物
陳
思
)

Grid of empty writing lines for practice.

(1)

○	ま	た
ひ	ど	な
さ	へ	ば
か	ま	た
た	た	は
の	や	あ
天	帰	め
つ	る	の
印	と	を
と	(才三秋部七月)	し
水無	(次郎百首)	で
河隔		の
マ		や
マ		へ
置		ぎ
き		りに
し		道
神		ふ
		み

織女朝

△
あ
の
部

(1) 名詞

(左) 右

万葉集 散本集

(五十音順)

(2) 万葉集の語彙を部分的に用いた歌

代し恨めし (卷十作者不詳)

百首歌中に雁を

(2)

かりがねもはねしぼるらんますげ生ふるいな

さほそえにあまづみせよ (オニ秋部八月) (堀河百首)

遠江引佐細江のみとつくし吾を頼めあさ

ましものよ (卷十・譬喻歌)

ひさかたの雨も降らぬか雨づつみ君に副ひ

この日暮さむ (卷四・常陸娘子)

雨障り常する君はひさかたの夜の雨に

懲りにけむかも (卷四・大伴女郎)

○	相	見	ら	く	飽	き	足	ら	ぬ	ど	も	い	な	の	め	の	明	け	き
へ	ま	ほ	な	ら	ず	と	も	(オ	九	雜	部)	(次	郎	百	首)
い	な	の	め	は	石	の	か	け	橋	ほ	の	ぐ	と	暫	し	や	す	ら	

岩のめはい

も	君	を	み	む	由	も	が	も	(卷	上	寄	物	陳	思)			
○	た	ま	ぼ	こ	の	道	ゆ	き	つ	か	れ	い	な	む	し	ろ	し	き	マ

秋	の	田	の	あ	ぜ	ふ	み	し	だ	き	な	く	鹿	は	い	な	む	し	ろ
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

田に鹿のなくと南マよめる

△
「
」
の
部

りにけり船出せむ専(巻十・柿本人麿歌集)

△
う
の
部

鳥羽殿にまんな恋のうたよみけるに人にかはりまよめる

(5) あしきたののさかの浦のうつせ貝いもせどな

べまいくよへぬらん(オセ・恋部上)

身のあやしき事と思ひつけて涙ぐまよめる

(6) ともすればまづつくらるるうつせ貝空しくマ

のみよもや過らん(オ九・雑部)

右兵衛督伊通の家は浦島が子といへる事とよめる

(9)

よそねしまいはの浪まと……からすまふおほ

をそどりの声きけば……(巻十・雑部下)

○鴉マふおほをそ鳥のまさごにも来まさぬ君

と見ろ来とぞ鳴く(巻十・相南)

くれども不留

(10)

思ひ草はず急に結ぶ白露のたま／＼きまは手

にもかゝらず(ヤハ恋部下)

○道のべの尾花が下の思草今さらさら何か

思はむ(巻十・秋相南)

観音寺に雨草花とへる事とよめる



カ
カ
シ
の
部

九月九日菊しかはなつよと人の申ければよめる

ま
く
ま
の
に
雨
そ
ほ
ふ
り
マ
木
隠
の
つ
か
や
に
た
マ

る
お
に
の
し
こ
ぐ
さ
(オ
三
秋
部
八
月)

の
萱
草
わ
が
下
紐
に
着
け
た
れ
ど
醜
の
醜
草
言
に
し

あ
り
け
り
(卷
四
・
大
伴
家
持)

の
わ
す
れ
ぐ
さ
垣
も
し
み
み
に
う
ゑ
た
れ
ど
し
こ
の

し
こ
草
な
ほ
恋
ひ
に
け
り
(卷
十
二
・
寄
物
陳
思)

(12)

らりごにて萎める貌の花なれば夏とも菊のし
るしあらめや (才三 秋部九月) (次郎百首)

野徑寒草

(13)

路すがら枯野にたてるかほが花ふりあけ髪も
霜をきにけり (才四 冬部十一月)

石橋の崖に生いたる貌花の花にしありけり

ありつゝ見れば (卷十 作者不詳)

美夜自呂の砂丘辺へ立つる貌が花な咲き出

でそね隠める憇はむ (卷十四 作者不詳)

たかまどの野辺の容花面影に見えつゝ妹は

(14)

忘れかねつも (巻八・大伴家持)

うち日さつ宮の瀬川の貌花の恋いまか寝ら

む昨夜も今夜も (巻十・相南)

△
きしの部

恨躬耻運雑歌百首

朝いぞいきびの豊みきのみかへしいはじとす

れど強ひて悲しき (巻九・雑部)

いにしへの人のたはせる吉備の酒病まばす

べなし母負篋賜らむ (巻四・丹生女王)

○をす国の遠のみかどい……還り来む白相飲

まむ酒ぞこの豊御酒は（巻六・元正天皇）

△ 7 ニシの部

夏草をよめる

(15) ひづかりは垣ねがくれに立ちよらで誰を恋草

もえたまるらむ（才ニ夏部六月）（次郎百首）

かたはらひせる人のこの頃はソかなることにか色もあを

みおとろへたるはなと申ければ

(16) 恋草にしみかへりたる色なれば思ひそめけむ

(19)

ば	かり	
つ	つ	
く	め	
る	る	
ま	我	
も	恋	
な	草	
し	に	
	も	
	し	
	ら	
	へ	
	こ	
	ま	
	に	
	あ	
	は	
	ね	

加賀守顕輔家の人々歌よみけるに恋の心と

(18)

し	恋
心	草
せ	を
よ	さ
な	し
み	に
	つ
	め
	る
	舟
	な
	れ
	ば
	か
	し
	も
	み
	と
	ろ

海路恋

(17)

あ	ひ
ふ	む
事	せ
は	び
夏	つ
野	つ
に	つ
茂	つ
る	つ
恋	つ
草	つ
の	つ
かり	つ
は	つ
ら	つ
へ	つ
ど	つ
も	つ
お	つ

夏恋

日	を
ぞ	う
う	ら
む	る
	(オハ恋部下)

○恋草と力車に七車積みて恋ふらくわが心か

ら (巻四・伝河女王)

旅 恋

したひくる恋のやつこの旅にても身のくせな

れや夕轟きは (才七・恋部上) (堀河百首)

○大夫の聴き心も今はなし恋の奴にわれは死

ぬべし (巻十二 正述心緒)

○家にある櫃にかぎさし蔵めても恋の奴のつ

かみかかりて (巻十六・徳積親王)

経年恋

年ふれどこすのきけきの絶えまよりみえしつく

ないなみは面影に立つ(オハ・恋部下)

の玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ねたらち牧の

母が向はさは風と申さむ(卷十・古歌集)

の青柳の糸のしなひを春風に乱れぬい向に見

せむ子もがも(卷十・春雑歌)

殿下にて雨中のすみれをよめる

たれと見て忍びかはせんつれぐとこし雨ふ

りマ堇咲野を(オハ・春部三月)堀川百首

の久方をち方の一本のはいふのこやにこし雨ふり床さへぬ

れぬみにそへわぎも (巻五 寄物陳思)

△ ㄱ ㄴ の部

やまとなごしこをよめる

今朝も又いざみにゆかむさゆりばな枝さしか

はす大和撫子 (才ニ夏部六月) (次郎百首)

○ 吾妹子が家の垣内のさゆりばな後ゆりとしいは

ばいなとふに似む (巻八 大伴坂上郎女)

○ あぶら火の光に見ゆるわが護さゆりの花の

笑才はしきかも (巻十八 大伴家持)

○ともしびの光にみゆるさゆり花後も逢はむ

と思ひそめまき (卷十八 介内藏伊美吉繩磨)

○さゆり花後も逢はむと思へこそ今のまさか

もうるはしみすれ (卷十八 大伴家持)

○大君の……夏の野のさゆり引き植ゑま咲く

花を出でみるごとくに…… (卷十八 大伴家持)

○さゆり花後も逢はむと下延ふる心しなくば

今日も経めやも (卷十八 大伴家持)

○つくばねのさゆるの花の夜床にも愛しけ妹

と昼も愛しけ (卷二十 大舎部千文)

〇いにしへにありけむ人のしづはたの帯解き

かへて伏屋立マ……(巻三・山部赤人)

〇いにしへの傳文はた帯と結び垂れ誰とふ人

も君にはまさじ (巻十一・寄物陳思)

△ ㄱ ㄴ の部

山里にマタがほを見てよめる

山がつのすとかたけがき枝もせに夕顔なれり

すがみく (ニニ夏部六月)

琳賢法師の大原の房にまかりて菘女郎花おもしろかりけるを人々よみければ

(27)

山里はすとかたけがき咲きはやす萩女郎花こ

きませてけり(オ三秋部八月)

○あらたまの伎(オ)倍(ウ)が我竹垣(ウ)あみめゆも妹し見え

なばわれ恋ひめやも(卷十一。正述心緒)

夜恋

(28)

よととも玉散床のすが枕みせばや人によは

のけしきを(オ七恋部上)

○足柄のままの小菅の菅枕何ぜか巻かさむこ

ころせ手枕(卷十四。東歌)

△
た
レ
の
部

百首中にかへるかりの心をよめる

春くればたのむの雁も今はとまかへる雲路に

思ひたつなり (オ・春部三月) (堀河百首)

○坂こえ阿倍のたのもにぬるたづのともし

き君は明日さへもがも (巻十四・相南)

別当実行家の歌合に月をよめる

軒端よりもりくる月をわぎもこがたまもの裾

に宿してぞみる (オ・秋部九月)

大殿の歌絵に山里と覚しき屋のつまに……

(31)

君まつと玉藻の床におきふしまいくたび鴨の

うきねしつらん(オハ・恋部下)

○うつせみの命を惜しみ波にぬれ伊良麩の島

の珠藻刈ります(巻一・麻続王)

○夕さらば潮みち来なお住吉の浅鹿の浦に玉

藻刈りまな(巻二・弓削皇子)

○飛鳥の明日香の河の……生ひなびける玉藻

ぞ絶ゆれば……(巻二・柿本人麿)

みわの山をよめる

(32)

三輪の山杉のしほりをしるべにまたづきもし

らぬかけぢをぞゆく (才五 羈旅部)

○草枕旅にしあれば思ひやるたづきも知らに

網の浦の…… (卷一・軍五)

○梓弓末のたづきは知らねども心は君により

にしものを (卷十三・寄物陳思)

○思ひやるすべのたどきもわれはなし逢はず

るまねく月の経ぬれば (卷十三・正述心緒)

○曉のかはたれ時に島陰かぎを漕ぎにし船のたづ

き知らずも (卷二十・他田日奉直得大理)

修理大夫顯季の樋口にて恋の心と

(33)

別れにしたつかの弓のしらとりをきのかはゆ

すり恋ぬ日ぞなき (オハ・恋部下)

のりゆみ

(34)

引きならすたぶかの弓のやを速みともねに的

の鳴りかはす哉 (オ九雑部) (次郎百首)

のたつか弓手に取りもちる朝獵に君は立たし

ぬ棚倉の野に (巻九・治部卿船五)

△
つ
レ
の
部

殿下にマ庭露といへる事をよめる

(35)

庭もせにさきすさびたるつき草の花にかかれ

る露のしら玉へオニ秋部八月

の朝露に咲きすさびたる月草の日斜くさるなべに消ぬべく思ほゆ(巻十・秋相南)

の月草に衣ぞ染むる君がためまだらの衣摺ら

むと思ひ(巻七・古歌集)

のつき草の移ろひやすく思へかもわが思ふ人

の言も告げ来ぬ(巻四・坂上大嬢)
 7
と
L
の
部

百首歌中に卯花をよめる

(36)

卯花も神のしもろぎときまけりとぶさもたは

にゆふかけりみゆ (才ニ夏部四月) (堀河百首)

とぶさ立マ足柄山に船木伐り樹に伐りゆき

つあたらし船木を (卷三・沙彌満誓)

とぶさ立マ船木伐るといふ能登の島山今日

見れば木立繁しも幾世神びぞ (卷十七 大伴家持)

みづれをよめる

(37)

雲にははなだめ袂かへるともわが遠づまを見

こそゆかめ (才四冬部十月) (次郎百首)

隙もなく漏りくる雨のあしの音を我がとほづ

才と思はましかば (才八・恋部下)

の遠妻のここにあらねば玉梓の道をた遠み思

ふそら (巻四 安貴王)

の朝づく日向ひの山に月立まり見ゆ遠妻を持

ちたる人し見つつ思はむ (巻七人麿歌集)

の風雲は二つの岸に通へどもわが遠妻の一に云はく
はしづまの

言ぞ通はぬ (巻八・山上憶良)

△
に
レ
の
部

(39)

みづぎもの

御調物にひくはまゆの系をもまくる手もたゆ

く供へつるかな (才九雑部) (次郎百首)

つくばねのいひくはまゆの衣はあれど君が

みけししあやにまほしも (巻十四・東歌)

△
フ
ね
の
部

恨躬耻運雑歌百首

(40)

道のべのこほりが下のねつこ草さとされし身

のたへがたのよや (才九雑部)

(42)

はむ
 がら
 ひさ
 にまきの
 雪散御
 ほかり
 ひは
 マゆ
 (才四冬部十一月)
 (次郎百首)
 の

野行幸

(41)

れ塩
 ぬが
 とま
 やの
 な煙
 くに
 (才四冬部十一月)
 まが
 ふ
 浜
 千
 鳥
 を
 の
 が
 は
 が
 ひ
 を
 な

千鳥をよめる

△
 っ
 は
 し
 の
 部

○
 ば
 吾
 恋
 ひ
 め
 や
 も
 (卷十四・相聞)
 芝
 付
 の
 御
 宇
 良
 崎
 な
 る
 根
 都
 古
 草
 逢
 ひ
 見
 ず
 あ
 ら

(45)

櫻花散かふはどは浪かけま洗ふ小島のひさぎ

花下迷懐

♪にむもれぬるかな(才九雑部)

(44)

なくそらにみちぬるしほの濱ひさぎ夕しくも

つけるはべりける

金葉集の奥に御らんじあはれべとおほしくまき

(43)

みも年をふるかな(才七恋部上)

君こふとなるみの浦のはまひさぎしほれたの

和し念ほゆ(巻一志貴皇子)

葦辺ゆく鴨の羽がいに霜ふりま寒き夕は大

(47)

川よ瀬瀬変るな(オ九雑部)
(次郎百首)

うなぬ子がはなちの髪を取らたててまきそめ

元服

りぬいもい逢見で(卷十・作者不詳)

おなみすよりみゆる小島の浜ひさぎ久しくな

てもすゞむ頃かな(オニ夏部六月)

ひさぎおふる山片陰のいしゐづゝふみならし

泉辺納涼といへる事をよめる

とぞみる(オ一春部二月)

のあたり見む (巻七・古歌集)

恨躬耻運雜歌百首

(48)

世の中を思ひはなまばはなち鳥とびたちぬべ

き心地こそすれ (才九 雜部)

島の宮まがりの池の放ち鳥人目に恋ひて池

にかづかず (巻二・舎人)

島の宮上の池なる放鳥荒びな行きそ君まさ

ずとも (巻二・舎人)

△
フ
ヒ
レ
の
部

985
(50)

づもれぬらん (オニ夏部五月) (次郎百首)

ときつ鳥なかぬ雲井にとろきま星の林はう

郭公をよめる

△
フ
ほ
シ
の
部

は若しきものを (巻八・大伴坂上郎女)

夏の野の繁みに咲ける姫由里の知らえぬ恋

馴れま人しみぬらん (オハ・恋部下)

(49)

きのふまでさびわにみえし姫百合のいつたり

殿下にて恋の心をよめる

○天の海に雲の波たち月の船星の林に漕ぎ隠
るみゆ (巻七・柿本人麿歌集)

△
マシの部

鶺鴒川をよめる

(51)

かがり火のほかげにみればますらをは袂いと
なく鮎子汲むらし (オニ夏部六月) (次郎百首)

(ますらをの語彙は万葉に甚だ多く例示

するにたえぬのが省略)

人々あまたまうてきて五首歌よみけるに恋の心を

986
(53)

と招きつるかな
（オニ・秋部八月）
（堀河百首）

旅すつきまほの糸をくりか
けてたえずも人

百首歌中に薄をよめる

丸寝をすればいぶせみと
（卷十八・大伴家持）

○あらたまの年の五年
きたへの手枕まがず

長歌

がするながきこのよを
（卷十・秋相聞）

○たびにすらひもとくもの
を事しげみ丸寝吾

しぬしぢのはしかき
（オハ・恋部下）

(52)

しるしあれや竹のまろね
を教ふれば百夜はふ

○才がね吹く丹生の才そほの色に出る言はな

くのみぞ吾が恋ふらくは (巻十四、相聞)

時鳥まつらさよひめ立ちるしまいれふるさと

に声なましみそ (才ニ夏部五月)

○遠つ人松浦佐用姫夫恋いに領巾振りしより

負へる山の名 (巻五、山上憶良)


○万代に語り継げとしこの嶽に領巾振りけら

し松浦佐用比賣 (巻五、作者不詳)

○海原の沖行く船を帰れとか領巾振らしけむ

松浦佐用比賣 (巻五、作者不詳)

の行く船も振り留みかね如何ばかり恋しくあ
 りけむ松浦佐用比賣 (卷五 作者不詳)


 7
 み
 の
 部

十首歌中に早苗を

(55)

流れつるけこのみわもり教そいまさやたの早
 苗とりもやられず (オニ夏部五月)

〇 哭沢の神社に三輪すゑ祈れども我が大君は

高日しらしぬ (卷ニ・拾隈女五)

堀河院御時艶書合せといへる事をせさせ給ひけるにつかう
 まつれる

(56)

数ならでよに佳の江のみとつくしいつをまつ

ともなきよせけり (オ七恋部上)

の遠江引佐細江のみとつくし我またのめりあ

さましものをも (卷十四・譬喩歌)

寄草恋

(57)

谷ふかみ水かげ草の下露やしられぬ恋のなみ

たなるらむ (オ八恋部下)

の天の川水陰草の秋風に靡かふみれば時はき

にけり (卷十・柿本人麿歌集)

かたらいける人のこと人に物申と聞てうらみ侍りければあれは

(58)

おかしよりいひそめたればなど申を南く

春たまはめぐむ垣ねのみやつこぎ我こそさき

に思ひそめしか (オ七恋部上)

○君が行きけ長くなりぬ山たづの迎へを鐘か

む待ちには待たじ (オニ・磐姫皇后)

(山たづとはみやつこぎ (ニハトコ 搦骨木) のこと)

△
7
めしの部

あそい待りける所にマ隆源阿南梨ソたくねぶりければかはらう
けさすとマかける

(59)

おひ茂るぬぶりの森の下にこそ目覚し草はう

うべかりけれ (第九雑部)

の暁の目ざまし草とこれをだに見つゝ坐しま

われを思ばせ (卷十二・寄物陳思)

△ 7
もしの部

祝のころを

(60)

君が代はおほはつせぜのもつえつき百えなが
らも栄えますかな (第五祝部)

のうつそみと思ひし時携へまわがニ人見し出

(61)

ど
た
ち
の
百
技
櫛
の
木
こ
ち
ご
ち
に
（巻二柳本人磨）

おなじころを（修理大夫頭季の六條の家にて七月七日

に寄織女恋といへる事をよめる）

う
か
り
け
る
も
の
の
ふ
な
れ
や
セ
タ
も
今
宵
に
な
れ

ば
あ
ふ
な
る
物
と
（牙七恋部上）

○
も
の
の
ふ
の
八
十
氏
人
も
吉
野
川
絶
ゆ
る
こ
と
な

く
つ
か
へ
っ
つ
み
お
（巻十八伴家持）

○
葦
原
の
み
づ
ほ
の
国
を
……
も
の
の
ふ
の
八
十
伴

雄
を
ま
つ
の
へ
の
む
け
の
ま
に
（巻十八伴家持）

伊勢に侍りける比たよりにつけて修理大夫のもとにつかはし
ける

(62)

とへかしな玉櫛のはにみ隠れまもずの草ぐき

めぢならずとも(オ九雑部)

春さればもずの草ぐき見えずとも吾れは見

やらむ君のあたりは(卷十・春相聞)

△
ヤ
レ
の
部

大貳長実白川にマ川辺興とソへる事をよめる

(63)

をかみ河やぎのはひえに鮎つりマ遊ぶもさめ

ぬそのね思へば(オ九雑部)

恋しければ来ませわがせこ垣内かきつやぎうれつみ

(64)

からし我立ち待たむ (巻十四 相聞)

△ 7 よしの部

東路のなこそこの関のよぶこ鳥なにつくべき

わが身なるらむ (第九雑部) (堀河百首)

の大和には鳴きまか来らむ呼子鳥象まうの中山呼

びま越ゆなる (巻一 高市黒人)

△ 7 わしの部

恋のうたよみける所にマ

(65) わすれ草しげれる宿ときこみれば思ひのきよ

りおふるなりけり (オ七恋部上)

注、「わすれ草」の語彙「お」の部に二首既出。ニニニは省略

百首歌中にすみれとよめる

(66) 我妹子が花の袂をかたみにてつめるすみれぞ

心ことなる (オ一春部三月) (堀河百首)

隔月恋

(67) あいこみま重ぬる月をわがもこが衣の袖をお

もはましかは (オ八恋部下)

うつせみと思ひし時に...吾妹子が形見にお

(68)

けるみどり見の…… (巻ニ・柿本人麿)

(注・その他「我妹子」の語彙は万葉に甚だ多い

ので例示省略)

▲ 7
をしの部

恨躬耻運雑歌(百首の中)

世の中はをぞのたはぶれたゆみなく包まれ

のみ過す頃かな (巻九 雑部)

のみやびと吾は聞けるを宿かさず吾を還せ

りおぞのみやびと (巻ニ・石川郎女)

(2)

夕立はきりにきるとも梓弓いにいりまさへはく

れ(ぼ)ぞ夢にみえける(巻四・大伴坂上郎女)

朝髪の思ひみだれかくばかり汝姉が恋ふ

もひみだれ(ハニ夏部五月)

(1)

朝ねがみゆふのみ山の時鳥はやうちとけぬお

又人にかはりて

あしの部

(2) 枕詞

れずもあるかな（次郎百首）

（梓弓の枕詞、万葉に甚だ多く例示省略）

△ ㄗ
いしの部

蝉をよめる

(3)

石ばしるたきのよどみにうちそへま木毎に蝉

の声きこゆなり（オニ夏部六月）

おなじ殿下にて人を恨とへる事をよめる

(4)

石ばしるとかはの滝も結ぶまにしはしはよど

む物とこそきけ（オハ恋部下）

(5)

○石いばはしるたるみの上のさわらびのもえいづる
春はなりにけるかも（卷八）志貴皇子）

殿下にマ初雪を

いそのかみ昔の跡も初雪のふりしきぬればあ

づらしきかな（茅四冬部十二月）

○いそのかみ布ふ留るの尊はた弱女の惑によりマ

（卷六・石上乙磨）

（その外にも「いそのかみ」は万葉に多い。）

例示省略）

(6)

う
つ
せ
み
の
い
で
か
た
く
も
す
ご
す
か
な
い
か
で

このよに跡をとめむ (才二夏部六月) (次郎百首)

(「うつせみの枕詞は万葉に甚だ多く例示省略)

(7)

△
う
お
し
の
部

14の御したはひろく長くして大空になんはうかるといふことをよめる

み
空
に
も
吹
き
か
よ
ふ
ら
し
大
口
の
ま
が
み
が
原
の

このした風は (才六釈教部)

の
大
口
の
真
神
の
原
に
降
る
雪
は
い
た
く
な
降
り
そ

(9)

衣手のさえゆくまゝに神なびのみむろの山に

又人にかはりマ

もみぢをぞみる (才四冬部十月) (堀河百首)

(8)

立田河しがらみかけマ神なびのみむろの山の

百首歌中に紅葉をよめる



カシの部

の原ゆ思い出つつ... (卷十三・相聞)

の三諸の神名火山ゆとの曇り... 大口の真神

家もあらなくに (卷八・舎人娘子)

雪はふりつっ (才四冬部十月)

○三諸の神名備山に五百枝さししじに生いた

るつがの木いやつぎに (卷三山部赤人)

○神名火の三諸の山にいつく杉思ひ過ぎめや

こけ生すまごに (卷十三・雑歌)

○葦原のみづほの国に神なびの三諸の山は

春されば春霞立ち (卷十三・雑歌)

○神名火の伊波瀬の社の呼子鳥いたくな鳴き

そわが恋まさる

(注・その外「神なび」の枕詞多く例示省略)

おしながかどり猪名山響に行く水の名のみ縁さ

宿りはなくマ (卷七・雑歌)

おしながが鳥猪名野をくれは有田山夕霧たちマ

すまじとさらむ (オセ恋部上) (次郎百首)

(11) 年越えぬさのみはまたじ息長鳥いなのみぞ川

隔年恋

にめをさましつ (オ五羈旅部) (堀河百首)

(10) しながが鳥みなののは山に旅ねして夜半のひがた

百首歌中に旅の心をよめる

△ 7 し の 部

(12)

之し 隠事ばも (巻十一 寄物陳思)

右京大夫経忠の六條家にてよめる

うの花の盛になればしらとりのさきさか山の

しほりとぞみる (才ニ夏部四月)

○白鳥の鷺坂山の松蔭に宿りて行かな夜も更

けゆくを (巻九 雑歌)

○たくひれの鷺坂山の白つゝじわれにほは

ね妹に示さむ (巻九 雑歌)

○白鳥のとば山松の待ちつつぞわが恋ひわた

るこの月ごろを (巻四 笠女郎)

(14)

○	ベ	恋
よ	き	し
の	昔	と
中	なら	も
の	ら	い
す	ね	は
べ	ば	ぞ
な	(オ	思
き	九	ふ
も	雑	た
の	部)	ま
は	(堀	き
...	河	は
...	百	る
た	首	立
ま)	ち
き		か
は		へ
る		る
命		

懐旧

に月傾きぬ (巻十七・土師道良)

○	れ
ぬ	は
ば	音
玉	の
の	み
夜	ぞ
は	なく
ふ	(オ
け	七
ぬ	・
ら	恋
し	部
た	上)
ま	
く	
し	
げ	
ニ	
上	
山	

(13)

た	た
ま	た
く	し
し	げ
げ	ふ
ふ	た
た	み
み	の
の	浦
浦	に
に	す
す	む
む	千
千	鳥
鳥	た
た	づ
づ	あ
あ	け
け	く

寄鳥恋

△ たし の 部

惜しけどせむすべもなし (巻五・山上憶良)

(たまきはるの枕詞・万葉に多し。その他略)

▲ ㄱ
なしの部

しるしば

(15)

夏しるぞひくうなかみ山の椎柴にかし鳥なきつ夕

あさりしる (才九雑部) (次郎百首)

夏あ麻さひく海う上の鴻の沖つ洲に鳥はすだけど君

は音もせず (巻七・作者不詳)

(16)

△ 7
に
し
の
部

百首歌中にかきつばたを

に
ほ
ど
り
の
す
だ
く
み
ぬ
ま
の
か
き
つ
ば
た
し
と
へ

た
つ
べ
き
わ
が
心
か
は
(オ一・春部三月)(堀河百首)

○ 鳩
鳥
の
か
つ
し
か
わ
せ
に
に
へ
す
と
も
そ
の
か
な

し
き
を
と
に
た
て
め
や
は
(卷十四・相聞)

○ 鳩
鳥
の
か
づ
く
池
水
情ニミ
あ
ら
ば
君
に
わ
が
恋
心
情

示
さ
ね

(卷四・大伴坂上郎女)

△ 7
は
し
の
部

はながつみといへる事がある人のよみたりけるを……

(17)

鳴のゐる玉ににおふる花が つみか つよみなが

ら知らぬなりけり (才九・雑部)

をみなへしさき沢に生ふる花が つみか つま

もしらぬ恋もするかな (巻四・中臣女郎)

△ 7
み
レ
の
部

百首の歌中に松をよめる

(18)

みさごゐる磯まに生ふる松のねのせはしくみ

ゆるよにもあるかな (才九雑部) (堀河百首)

見	百	▲			○		○		○
に	た	7		よ	み	ら	み	告	み
こ	ら	も		り	さ	ず	さ	ら	さ
ぞ	ぬ	し		は	ご	吾	ご	せ	ご
る	や	の		吾	み	が	み	親	み
と	そ	部		こ	る	恋	る	は	る
も	す			そ	洲	ふ	沖	知	荒
	み			ま	に	ら	の	ると	磯
	坂			さ	を	く	荒	とも	に
	の			め	る	は	磯	(生
	白			(舟	(に	三	ふ
	つ			卷	の	寄	よ	山	る
	っ			土	夕	物	る	部	名
	じ			譬	し	陳	浪	赤	乗
	し			喻	ほ	思	の	人	藻
	ら)	を)	ゆ)	の
	じ				待		く		よし
	な				つ		へ		名
	人				ら		も		は
	は				む		知		

(次郎百首)

(卷土・譬喻)

(卷十一・寄物陳思)

(卷三・山部赤人)

(20)

○百足らず八十隈坂に手向せば過ぎにし人に

蓋し逢はむかも (巻三・刑部垂磨)

田上にマサフの山にのぼりてあそびけるにまゆみの

もみぢと見まよめる

もっっいでのいそしのさっふ時雨しまそっひ

こまゆみ紅葉しにけり (才四・冬部十月)

○百伝ふ磐余の池に鳴く鴨と今日のみ見まや

雲隠りなむ (巻三・聖徳皇子)

○ももぶたふ八十の島回を漕ぐ舟にのりにし

心忘れかねつむ (巻七・譬喻歌)

のももづたふ八十の島みを漕ぎくれど粟の小
 島は見れど飽ぬかも (巻九・柿本人麿)

(注・(20)は(一)の(36)に既出。参照のこと。)

○
あ
み
の
浦
に
船
乗
り
す
ら
む
を
と
め
ら
が
玉
裳
の

は
し
め
ら
れ
に
け
り
(
オ
九
・
雑
部
)

(1)

紫
口
引
く
あ
ご
の
浜
や
に
年
ふ
り
マ
イ
や
み
に
ま
し

・
お
き
な

△
ア
あ
し
の
部

(3)

地
名

(2)

裾に潮満つらむか (巻一・柿本人麿)

○ 嗚呼見の浦に船乗りすらむ 媿孀らが珠裳の

裾に潮見つらむか (巻一・柿本人麿)

鶴

網引するみつの浜べにさはがれまあげをささ

のへたづかへるなり (オ九雑部) (堀河百首)

○ 妹が髪上竹葉野の放ち駒あらびにけらし逢

はなく思へば (巻上・寄物陳思)

(4)

ね	い
し	た
ま	め
色	や
変	ま
り	い
ゆ	た
く	し
(や
才	は
四	し
冬	も
部	時
十	雨
月	れば
)	木
	々
	の
	ま

はしの紅葉をみまよめる

(注) この万葉歌は、名詞「み」の部(56)の本歌と重複。参照のこと)

のを (卷十四 譬喩歌)

の	遠
江	引
佐	細
江	の
漣	標
吾	を
頼	め
ま	あ
さ	ま
し	も

(3)

さ	か
ほ	り
そ	が
え	ね
に	は
あ	は
ま	ね
づ	し
み	ほ
せ	ら
よ	ん
(ま
才	す
三	げ
秋	生
部	ふ
八	る
月	い
)	な
(
堀	
河	
百	
首	

百首歌中に雁を

△ 7
い
の
部

○ 殺 目 山 往 反 り 道 の 朝 霞 ほ の か に だ に や 妹 に
逢 ば ざ ら お (卷 十 二 ・ 寄 物 陳 思)

△ 7 おし の 部

秋 情 寄 萩

(5)

秋 萩 を 心 に かけ る を か が き の お ほ み あ し ぢ を

な つ み ま ぞ ゆ く (才 三 秋 部 八 月)

○ 岡 の 崎 た み た る 道 を 人 な 通 ひ そ あ り つ っ も

君 が 来 ま さ む 避 道 に せ お (卷 十 古 歌 集)

(7)

住吉のしきつ浦に旅ぬし
松の葉かぜにめ

住吉に旅の心をよめる

△ 7
し
の
部

れ立ち待たむ (巻十二・悲別歌)

〇 磐城山直越え来ませ磯崎の許
奴美の浜にわ

の たたぬ日ぞなき (才七恋部上)
(次郎百首)

(6)

い つとなくこぬみの浜に君待つとたづふ波

待人といへる事を

△ 7
こ
の
部

(8)

まさましつる (オ九雑部)

○住吉の敷津の浦の名告藻の名は告りましを

逢はなくもあやし (卷十二・作者不詳)

△ ㄱ なしの部

寄山恋

あまざりあひゆふぬる雲にとぢられま妹まど
はせるなにおふせの山 (オ八恋部下)

○これやこの大和にしまは吾が恋ふる紀路に

ありとふ名に負ふ勢の山 (卷一・阿閑の皇女)

(10)

雲のぬるふじのなるさは風こして清見が関に

殿下にてちる紅葉をよませ給けるによめる

△ 7
ふ
し
の
部

いほりすわれは (巻十五・柿本人麿)

の玉藻刈るをとめをすぎま夏草の野島が崎に

ふかぬ日ぞなき (才ニ夏部示月)

(9)

しほみまば野島が崎のさゆりばに波こす風の

△ 7
の
し
の
部

皇后宮権大夫師時の八條の家の歌合に野風を

にしきをさりかく (才四・冬部十月)

のさ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の

高嶺の鳴沢の如 (卷十四・相聞)

▲ ㄱ미ㄴ의部

尼上うせ給ひてのちみらくのしまの

事をおもひ出てもめる

(11) みらくくのあが日のもと島の島ならばけふも御

影にあはましものと (才六・悲歎部)

の「万葉集卷十六」の「筑前国志賀の白水郎あまの歌十首」の由来に

(12)

△ 「や」の部

高陽院殿の歌念に祝の心をよめる

つき説明した中に「肥前國松浦県美祢良久ミネラクの崎よりふさだち飛艇して、」
 とあるのもと、俊頼は外國と考へマツたと思はれる。ともあれ、俊頼は、
 卷十六の白水郎あまの短歌の成立事情をも入念に読んでいたのである。

おちたぎつやそうぢりのはやきせに岩ニす波
 は千世の数かもへち五・祝部)

ものふのやそ宇治川のあじろ木にいさよ

ふ波のゆくへ知らずも (卷三・柿本人麿)

(1)

むその草深野

(卷二商人の連老)

のたまきはる内の大野に馬なめり朝ふますら

すらんいざ行て見ん(才一春部三月)

きづすなくすたのに君がくちすへりあさふま

する所をよめる

屏風の絵に春山里に人々ながめりみたる野にたかり



あしの一部

(4) 動詞

寄山恋

(2) あまざりあひゆふぬる雲いとぢられぬ妹まど

はせるなにおふせの山 (才八恋部下)

○天霧らひ日方吹くらし水莖の岡のみなとに

波立ちわたる (巻七・古歌集)

○さを鹿の妻よぶ秋は天霧らふ時雨をいたみ

さいつらふ (巻六・作者不詳) (長歌)

○天霧らひ降り来る雪の消えぬとも君に逢は

むとながらへわたる (巻七・作者不詳)

○三諸の神名火山ゆとの曇り雨は降り来ぬ雨
霧らひ風さへ吹きぬ……(卷十三 相聞)

鶴

(3)

網引するみつめ浜べにさはがれてあげをさゝ

めへたづかへるなり(才九・雑部)(堀河百首)

○網引する海子とか見らむ飽の浦の清き荒磯

を見に来しわれを(卷七・柿本人麿歌集)

○大宮の内まご南ゆ網引すと網子調ふる海人

の呼び声(卷三・柿本人麿)

○わが衣人にな着せそ網引する難波壮士の手

には触るとも（巻四・大伴旅人）

（注・（3）の歌は地名「あし」の部（2）に既出。）

宮古にすみあびて田上にまかりてよめる

(4)

あしびたくまやの住家は世の中をあくがれ出

づるはじめなりけり（第九・雑部）

○なには人あしびたくやの煤てあれど己が毒

こそ常めづらしき（巻十一・寄物陳思）

△「あし」の部

山

(6)

しづのあさ衣かは (オハ恋部下)

これをみよむつ田の淀にさざしましほれし

皇后宮権大夫師時の八條の家にて歌合によめる

△ 7 さし の 部

(注: この(5)は(一)の「し」に既出。参照のこと。)

くとも色に出でめやも (巻三・長屋王)

の磐が根のこごしき山を越えかねて哭には泣

を帰りみるべきつオ九雑部)

(5)

いぐしをり越えてか人に岩がねのこりしく山

○吉野川 上つ瀬に鶴川を立マ下つ瀬にさ

ぞさし渡し (巻一・柿本人麿)

○みつかはれ瀬音もいぢずさぞさすに衣手ぬ

れぬ乾す兒はなしに (巻九・春日)

△ 7 ししの部

恨躬耻運雑歌百首

(7) 世の中をいぞや何かはと思へどもしなへうら

ぶれなづみまぞふる (才九雑部)

中納言国信の坊城の堂にマ人々長歌よませに

(8)

けるに白泉述懐といふ事をよめる

よそねしまいはの浪まを……故郷にしなへう

らぶれなづみおる……(才十雑部下長歌)

○ゆく川の過ぎにし人の手折らねばうらぶれ

立まり三輪の松原は(卷七柿本人麿歌集)

○君に恋ひしなえうらぶれわが居れば秋風吹

きま月傾きぬ(卷十、秋相聞)

△ 了すしの部

殿下にマ雪中遠情といへる事をつかうまつれる

(9)

すゝたれるまやのあしよりもる雪やみししは

こしのひにも有らん(オ四冬部十二月)

○なには人あしびたくやはすしたれどをのが

つまこそとこめづらしきへ巻上・寄物陳思)

△ 7 ほしの部

人にしらるこい

(10)

まきの板をほるにあだしま通ひこんにくいも

あへず妹がしなひに(オ八恋部下)

○天雲をほるに踏みあだし鳴神も今日にまさ

(12)

櫻
あさ
の
お
ふ
の
う
ら
な
み
立
か
へ
り
見
れ
ど
も
あ

なしの花さかりなりけるをみるよめる

ずぞ思ひそめまし (巻土・寄物陳思)

。宇治川の水泡さかまき行く水のことかへさ

ざがたのよや (オ九雑部) (堀河百首)

(11) 大井川みなはさかまく岩ぶちにたゝむ筏のす

河

△ 7
みレの部

りまかしこけめやも (巻十九 泉犬養命婦)

かぬ山なしの花 (才一・春部三月)

○河上のつらつら椿つらつらに見れども飽か

ず巨勢の春野は (卷一・春日藏首老)

㊦ ㄱ ㄴ の 部

左京大夫経忠の八條の家にてよめる

(13)

ほととぎす声待ちかねるゆふけとふ道のうら

にもことよきものを (才一・夏部五月)

○言靈の八十のちまたに夕ゆふけ占問へば正に告り

つ妹はあひよらむ (卷一・寄物陳思)

○ ^{ゆいけ}夕トにも占にも告れる今夜だに來まさぬ君

をいつとわか待たむ (卷十・正述心緒)

16) 希望の助詞 (終助詞)

恨躬耻運雜歌百首

(1) 葉がへせぬなけきの森は冬くれど常にもがも

なとこしなへなり (牙九雜部)

○ 河のへのゆつ岩群に草むさず常にもがもな

とこをとめはま (卷一・吹苧刀自)

(7) 接頭語

△ ㄱ
いし の 部

大殿の歌絵の中に男のつらづえをつきてみたるまへにこし思ひあり。

又へといへる物あり。鶴むかひまたり。からゝ女ひとりある所をよめる

(1) 恋しともいささ、はいほじ年をへまうきから人

を思ひ出るに(才七・恋部上)

のわが宿のいささ、群竹吹く風の音のかそけき

此夕べかも (卷十九・大伴家持)

以上の如くになる。中には万葉の歌二首を
 以て本歌とし一首に統合している場合もある。
 また万葉の語彙を部分的に用いている本歌
 取りの場合には名詞が最も多くついで枕詞、
 詞、地名といふ順になり、助詞、接頭語が最
 も少ない。万葉集全体を本歌とした例は三十六
 首あり、部分的語彙を本歌としている例に至
 っては三十八首の多きに達しているのである。
 しかかも俊賴にあつてはこれら万葉の本歌を
 ただ真似ているのではなく、俊賴自身の歌に

完全に消化されてい
る所にその特色を
みいだすことがあ
る。ここにいわゆる
万葉学者の歌でな
くて歌人俊賴の勝
れた力量、技法が
あつた。

第四章

俊賴と三代集・その他

— その伝統性 —

前章に於ては俊賴と万葉集との關係を李歌
取という具體的な作品の面から述べてきた。

俊賴は晩年になるに及ぶ万葉集との關係は
益々密に結ぶついでに、思ふにこの事は
俊賴の和歌の革新意圖の中に万葉集を再生せ
しめたるもので當時の平安朝の平枝な和歌の在

り方への批判的実作行動ともいえる。今時に
これは俊賴の和歌の一面の特性を物語るもの
であつた。それでは三代集という伝統和歌と
の関係はどのようなのか。この章に於てはこの事
につき考え、具体的な本歌取といふことにつ
き述べてみたい。

俊賴は革新歌人といわれる。それはまた事
實でもあるが、その俊賴にして和歌の伝統性
とほこれまた極めて深いつながりをもつてい
るのである。歌本集のすべてこの歌が全部新奇

な、また珍しい歌ばかりではない。平凡な歌、
 優美な伝統和歌の類型も多くみいだされる。
 「俊賴口伝」に於ても種々なる角度から三代集の
 歌は非常に多く例示されているのである。古
 今集が百余首、後撰集が三十余首、拾遺集が
 五十余首で凡そ二百首近くの歌が彼の歌論、
 歌学の対象として抜き出され、古今集歌人の
 数も多く、二十八人の人達が舞台上で活躍して
 いるのである。中で「よみ人しらす」の五十一
 首は別にして、貫之の十三首、業平の七首は多

い方で素性（六首）次に友則が（四首）あがっ
 てゐる。ことに「けだかく遠白き俵」下首の中
 に貫之の「思ひかねいもかりゆけば」の歌が
 あり、そのほか理想的な歌の中にも「袖ひぢ
 てむすびし水の」吉野河いは波たかく……
 「桜ちるこの下風は……」壽の歌をあげ、或いは
 忠岑の「春たつといふはわりには……」、また能宣
 の「紅葉せぬときはの山に……」などすべて「古今集」
 「拾遺集」の歌から採りあげてゐる。（人麿の「たの
 めつこぬよ敷多になりぬれば」）
 「和歌の浦が正し」
 難波瀉潮

みちくれば……(吾人)の歌もこの中にあり)尤も
 能宣は正しくは後撰集時代の歌人。このよう
 に三代集歌人達はいずれも秀れた歌人として
 俊賴は高く評価してゐるのである。こゝしたとこ
 ろに俊賴の伝統的和歌觀がうかがわれる。
 俊賴と革新歌人と誰かがいう。それは間違
 いではないが、一方俊賴の伝統性もまた彼の
 一面である事を忘れてはならない。
 そうでないといと彼の和歌史的或いは歌壇史的
 正しい位置づけは出来なからう。三代集

或いは平安朝の歌物語、私家集などからの引用作品について「俊賴口伝」に於て別に考ふるゝでここでは彼自身の三代集の歌取につき次に具體的例示としておく。

(一) 古今集からの歌取 (右…散木集歌、左…古今集)

(1) いっしかと木の松の山かすめるは波とともに

や春もこゆるむ (正月)

(2) ほとぎす末の松山風ふけは浪こすく水に

たちみ鳴くなり (五月)

○ 君をおきてあだし心をわがもたば末の松

山浪もこえなむ (巻せ・東歌)

(3) 櫻あさのを子の浦なみ立ちかへり見れども

あふぬ山なしの花 (三月)

○ をふの浦に片枝さしおほひなるなしのな

りもならずもねてかたうは人 (巻せ・東歌)

△ さくらをのふの下車露しあれは明して

い行けは知るとも (万葉集・巻十一)

(注) (3) は「古今集」「万葉集」の右の二首と本歌

としてゐる)

(4) その國を思ふもぢずりとにかくに願ふ心の

みだれずもがな (秋歌)

○みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱

れんと思ふ我ならなくに (巻十四・恋)

河原左大臣

(5) 時鳥あづさのそまの杣人に声うちそへて宮

本引くなり (五月)

○そま人は宮木ひくらしあしびきの山の山

びこよびどよむなり (巻十物名・墨減歌)

(6) 鳴け、かしな、たむけ、の、山の、時、鳥、青、葉、の、ぬ、さ、も、

と、り、女、へ、ぬ、ま、で、 (五月)

○このたびはぬさもヒリあへずたむけ山紅

葉の錦神のまにまに (卷九 蕪旅)

(7) みよしののかたちのをのの女郎花たはれて

露ににおかるな (七月)

○あきくれば野べにたはるゝ女郎花いづね

の、人、か、つ、ま、で、み、る、べ、き (卷十 九、雑体)

(8) あだにゆく水の心にさそはれてをうき草

と、人、に、か、た、ら、む (別離)

○わびぬれば身をうき草のねをたえてさそ

小水あうはいな人とを思ふ
（巻十八・雑下 小野小町）

（注・（8）は詞書の中にも小野小町の歌たる

ことをほのめかしてゐる。）

(9) かの岸にわたらむものはあすか河さはりの

測、
や瀬になりぬらむ
（秋教）

○世の中は何か常なるあすか川きのふの測、

ぞ今日ほせになる
（巻十八雑下 よみしらす）

（俊賴の旋頭歌には「あすか川うまきにつもるあは雪の浪たちくれはたのむ

しげなきよにも降るかな」という「無常の心」をよんだ歌もある。
（これら古今集に よるもの。）

(10)

よ、さ、の、浦、に、島、が、く、れ、ゆ、く、釣、舟、の、行、方、も、し、ら、ぬ、恵、も、す、る、か、な、(恵部上)

○ほ、の、く、と、あ、か、し、の、浦、の、朝、霧、に、島、が、く、れ、

ゆ、く、舟、を、し、を、思、子、(巻九・四、薪、旅、歌、)(よみ人しらす)

※(この歌はあまのいはく、神事人度か歌也)

※参考歌

▲ゆ、ら、の、と、を、わ、た、る、舟、人、か、ぢ、を、た、え、ゆ、く、へ、

も、し、ら、ぬ、恵、の、道、か、な、(曾、祢、好、忠)

(11)

す、ま、の、浦、に、ゆ、く、塩、が、ま、の、煙、こ、そ、春、に、し、ら、れ

ぬ、霞、な、り、け、れ、(推、部、河、花、集、入、様)

○す、ま、の、あ、ま、の、塩、や、く、煙、風、を、い、た、み、思、は、ぬ

方、に、た、な、び、き、に、け、り、(巻十回・よみ人しらす)

(12)

行、末、を、思、つ、ば、か、な、し、津、の、團、の、な、か、ら、の、橋、も

名、に、残、り、け、り、(雑部・千載集入撰)

○世、の、中、に、ふ、り、ぬ、る、も、の、は、津、の、團、の、な、か、ら、

の、橋、と、我、と、な、り、け、り、(巻十七・よみ人しらす)

(13)

さ、ら、科、は、を、ば、捨、山、の、麓、に、て、い、か、で、部、に、名、を

と、い、む、う、ん、(雑部)

○我、心、な、ぐ、さ、め、か、お、つ、さ、ら、科、や、を、ば、捨、山、に

照、る、月、を、み、て、(巻十七・よみ人しらす)

(14) せきもあへぬ流の川は早やけれど身の浮草

は流れざりけり (雑部・金葉集入撰)

○あびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ

水あらばいなんとぞ思ふ (巻十八 雑下) わ野木町

(15) 紫の庵にはひおほられる青つづらむづかし

げなるよにもふるかな (雑部)

○山がつの垣ほにはへる青つづら人はくれ

ども言伝もなし (巻十四 六龍)

(16)

今よりはうれしがらせよおしかへてあふさ
きふさのわが身と思はむ
(雑部)

○そへにとてとすればかくりかくすればあ

な言ひ知らずあふさきさきに
(巻十九よみ人
謙語歌)しらす)

(17)

人はいさ吾はよひよりあふさかのゆふつけ
鳥のねをのみぞなく
(五月)

○あふさかのゆふつけ鳥にあらばこそ君が

ゆききをなくなくもみぬ
(巻十四
閑院)

(18)

て
る
月
の
た
び
ね
の
と
こ
や
し
も
と
や
ふ
か
づ
ら

き、山、の、谷、の、か、は、水
(九月・千載集入撰)

○し、も、と、や、ふ、か、づ、ら、き、山、に、降、る、雪、の、向、な、く

時、な、く、思、ほ、ゆ、る、か、な
(卷二十
大教所御歌)

(19)

い、と、ど、し、く、旅、寝、の、本、の、露、け、き、に、し、ぎ、の、羽、が、

き、決、そ、ふ、よ、り
(卷五
蜀旅部)

○あ、か、つ、き、の、し、ぎ、の、羽、が、き、百、羽、が、き、君、が、来

ぬ、夜、は、我、ぞ、教、か、く
(卷十五
よみ人しらす)

(20)

う、れ、し、き、の、光、を、袖、に、つ、い、み、て、も、う、ら、な、る、国

を、み、る、よ、し、も、が、な、
(^{表ニ}秋教部)

○ う、れ、し、き、を、何、に、つ、ま、む、唐、衣、袂、中、た、か、に

裁、て、と、い、は、ま、し、と、
(^{卷ニ}裁上) ・ よ、み、人、し、ら、ず、

(21)

名、に、し、お、は、は、し、ら、じ、な、わ、だ、の、部、鳥、心、づ、く、し

の、か、た、は、そ、こ、と、も、
(^{表ニ}悲歎部)

○ 名、に、し、お、は、は、い、が、こ、と、と、ほ、ん、部、鳥、わ、が、思

ふ、人、は、あ、り、や、な、し、や、と、
(^{卷九}薪旅・業平・伊弉方物
語ニモ)

(22)

嬉し
さの
ねを
さへ
今日
はか
くる
かな
何の
あ
やめ
もし
らぬ
袂に

(五月)

卷二

○ほととぎす
なく
や五月の
あやめ
草あやめ

も知らぬ
患も
する
かな

(卷十一
患二)

しよみ
ずん

(23)

空、
蟬の
いで
か
く
て
も
すぐ
す
かな
いか
で
こ

のよに
跡をと
めまし
(六月)

卷二

空、
蟬は
か
ら
を
見
つ
も
慰
め
つ
深
草
の
山
け

おり
だ
に
た
て

(卷十六
哀傷)

信部勝延

(24)

み、山、に、は、嵐、吹、く、ら、し、あ、じ、ろ、本、の、か、き、あ、へ、ぬ

ま、で、紅、葉、つ、も、れ、り

(卷四 十月)

○ 子、山、に、は、あ、ら、れ、ふ、ら、し、と、山、な、る、ま、さ、き

の、か、づ、う、色、づ、き、に、け、り (卷五 大歌所収)

(25)

ね、ぬ、な、は、に、枝、さ、し、か、は、す、丸、小、菅、ま、る、を、こ、す

と、や、琴、と、さ、だ、め、し (卷八 恋部下)

○ 隠、れ、沼、の、下、よ、り、生、ふ、る、ね、ぬ、な、は、の、ね、ぬ、な

は、た、て、じ、来、る、名、い、と、ひ、そ (卷十九 誹諧歌 しみず)

散木集第十雜部下の冒頭には「百首歌中述懐とよめる」題のもとに「長歌」がある。「堀川百首」出詠の歌で、(俊賴五十才の時)千載集卷十八(雜歌下)にも採用された。

「もがみ川」せせの岩かど、おきかへりに姓まる長歌である。この長歌の内容をみると三代集と南條のある表現、本歌取りなどもあろうので、南條個所のみを対照しておく。

(26) 「底のみくづと」なることは、もにすむ

虫の

我からと

「」

○あまのかるもにすむあしの残からとねを

こそ身かめ世をぼうらみじ (巻十五(志五) 藤原直子)

(27)

し、む、の、あ、さ、衣、
た、ち、ま、じ、り、う、つ、ぶ、

し、む、の、あ、さ、衣、

○世をいとひ本のもとごとくに立ちよりにう、

つ、ぶ、し、む、の、麻、の、装、束、なり (巻十九(雑体) よみ人しらす)

以上、大伴主な古今集本歌取りをあげた。

(但し、本歌を同じくしている俊頼の歌は他に

もあるが一首を以て代表させ、他は省略した。)

(二) 後撰集からの李歌取

(古今時代の歌人でも本集に入撰の作者はここに取り扱った。)

(1) 時鳥ふたむら山を尋ねみむいりあかの声や

けふはまさると (五月)

(2) くればほとりふたむら山をきてみればめもふ

やにこそ月はすみけれ (九月)

○くればほとりあやにゑしくありしかばふた

むら山も越えずなりにき (後撰集悪三 清泉諸実)

(3) おのれかつ散るもや雪と思ふらむみのしろ

こも花もきてけり (二月)

○ふ、る、雪、の、み、の、し、ろ、じ、ろ、も、打、ち、着、つ、春、き

に、け、り、と、驚、か、れ、ぬ、る、(巻一、藤原敏行)

(4) 山、が、つ、の、蚊、を、い、と、ひ、け、る、す、く、も、火、に、心、を、さ

へ、い、流、へ、て、や、る、か、な、(六月)

○津、の、國、の、な、に、は、立、た、ま、く、惜、し、み、こ、そ、す、く、

も、た、く、火、の、下、に、息、る、れ、(巻十一、紀内親王)

(5) 三、日、月、の、影、に、漂、ふ、か、げ、ろ、ふ、の、ほ、の、ほ、か、に、て

も、世、を、す、ぐ、す、か、な、(雜)

○夢、よ、り、も、は、か、な、き、も、の、は、か、げ、ろ、ふ、の、ほ、の、

か、に、見、え、し、影、に、ぞ、あ、り、け、る、(巻四、生忠岑)

後撰集からの本歌取りは古今集に比して非常にすくないのが特色。(内、藤原敏行・壬生忠岑は古今集歌人である。)

(三) 拾遺集からの本歌取

(1) 望月の駒のけづけを逢坂のすきまのかけに

あはせてぞみる (八月)

○ あふさかの園の清水にかけ見えて今やひ

くらん望月の駒

(巻三・貫之)

(2) からかみに袖ふるほどはとのもりのともの

宮つこみひしろくたけ(十一月)(堀河百首)

○とのもりのとものみやつこにあらばこの

春ばかりあさぎよめすな(巻十右・源公忠朝臣)

(3) 暮れてゆく春を思ふも来ぬ人を待つにもま

さる中かぬ心は(三月)

▲おくにあまのや船もとかけり

この歌は贗琴歌二首の「返」である。詞書に

よると三月晦日、時房の所へ訪向の約束をして

いふが急に役頼に宛中参内の用が出来て果た

せなかつた時、時彦の方から

△立ちかへり春思ふだにあるものと君をさ

へけふ待ちくらしつる

▲ほしがきにさとをばかかれずとかけり

の一首が贈られた。そ水に討する返事が先

の俊頼の歌なのである。この贈答歌にはいずれも

▲印を附した追書が書き込まれているのが特

色でこれはいずれも本歌と提示してあるので

ある。即ち、時彦の歌の事歌とやつたのは、

△今ぞ知る苦しきものと人またむ里をばかれ、

ずとふべかりけり (古今集卷十八 在原業平)

の一首であり、里をばかかれずを時彦は、自

作の奥にさらに書き込んだのであり、俊賴は

またそれをうけ、自詠のみでなく、その事歎

として、

○風をいたみ思はぬ方に泊するあまの小船

もかくやわぶらむ (拾遺集卷五 源景明)

の歎の中「あまの小船」の語を追書したので

ある。かくの如くこの二首の贈答歎はいずれ

もその詠歎に当ってほ夫々この場にふさわし

い本歌と想定していたのである。

これによく似た例が今一つある。俊忠との

賜答歌に、

△さきそむる梅のたち枝にふる雪のかさなる

か、ず、を、と、へ、と、こ、そ、お、も、へ (俊忠)

返し

(4) 梅が枝に心もゆきてかさを知らずや人

の、と、へ、と、い、ふ、ら、ん (俊頼)

の二首があるが俊忠の歌は拾遺集巻一春の

△わが宿の梅の立枝や見えつらん思ひのほ

かに君がきませる（手尊盤）

を奉致としていゝるし、それを受けて返した

(4) の俊頼の致は伊勢物語の

△思へども身としわけねばめかれせぬ雪の

つもるぞわが心なる（八十五段）
（日本古典文
学大系本による）

を奉致としていゝる。伊勢物語のこの致は惟喬

親王と兼平とのこととを主題としており、雪に

降りこめられ親王の御許に考候お末なかつ

兼平の心境致で、俊頼の「心もゆきてかさな

る、さしは俊忠の返し致としてはまことにふさ

わしく、今時に伊勢物語の本歌の世界にも通じているのである。従つて俊賴の歌は、拾遺集、伊勢物語の二つの架橋的役割をふまえた巧妙な手法になつてゐる。「雪」と「行」^しとの掛詞はその具體的表象であり、下句「知らでや人のとへといふらん」はその心境的表白であつた。この二首とも千載集に入撰してゐる。

(5) を、ぎへ、なき高瀬の舟をさしすゑてとりかひ

にても暮しつるかな

(第五)

新旅部)

○はしたかのそぎ、忍にせんと構へたるおし

あゆがすな鼠とるべく (巻七 物名)

(6) 夏、夜、たち、き、る、け、ふ、の、し、ら、が、さ、ね、知、ら、じ、な、人

にうらもなしとは (巻二 四月)

○夏、夜、た、ち、わ、か、る、ま、こ、よ、ひ、さ、へ、ひ、と、へ、に

をしき思ひそひぬれ (巻六 別・村上天皇)

また、(一)古今集の本歌取りに散不集第十の

長歌のことと述べたが、同じその長歌に「捨

遺集」の本歌取りもある。肉係個所のみを示

す
と
次
の
よ
う
に
な
る
。

(7)

思
は
む
人
に
あ
ふ
み
な
る
打
出
の
法
の

う
ち
で
つ
い

近
に
な
る
打
出
の
法
の
う
ち
い
で
て
恨
み
や
せ

ま
し
人
の
心
を
(巻十五・(患五)よみ人しらす)

(8)

津
の
國
の
い
く
た
の
も
り
の
い
く
度
か

○津の國のいくたの川のいくたびかつらき

心をわれにみすらん(巻十四・(患四)よみ人しらす)

以上拾遺集奉款取りも後撰集同様極めて少ないが、款によつてはその背後に伊勢物語などとも関係をもつている場合もあるという風に、勅撰集以外、款物語、私家集、古今六帖などを始め款滯の「催馬楽」などから幅広く俊賴は奉款取りをしていく。以下、三代集の延長という意味で、これらのごとについてもここにふれておこう。

◎ 古今六帖からの奉取取り

(1) あ、ぢ、さ、み、の、花、の、よ、び、ら、に、も、る、月、と、影、も、さ、な

が、ら、を、る、身、と、も、が、な

散木集 第二
(六月)

○ あ、わ、ね、さ、す、ひ、る、は、こ、ち、た、し、あ、ぢ、さ、み、の、花、

の、よ、び、ら、に、あ、ひ、み、て、し、が、な (第六)

(2)

み、な、く、ぐ、り、
綱の、は、か、ひ、の、か、ひ、も、な、く、人、を、雲

井のよそに見るかな
(第七 志部上)

○ 下、に、の、み、に、ほ、の、か、よ、ひ、の、み、な、く、ぐ、り、入、り

ぬ、る、磯、は、見、ら、く、す、く、な、し (第三)

(3) 奥、山のくきかくれなるは、たつもりしうれぬ

恋になづあ頃かな (恋部上・次郎百首)

第七

○ 我恋は、み山に生ふるは、たつもり、續りにけ

らし産子由もなし (才言)

(4) 葦本は、おもてふせやと思へばや、近づくまゝ

にかくれゆくらん (志部上)

第七

○ そのは、らや伏屋に生ふるは、さきか、のあり

とてゆけど、産はぬ思かな (第五) (新古今恋一
以上是明)

(5) なぞしかく別れそめけむ常陸なるかしまの

帯の恨めしのよや (第五・別離)

○ あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごと

ばかりしあはんとぞ思ふ (第五 友別 新古今 入 撰)

◎ 伊勢物語・歌謡からの本歌取り

(1) かくばかりすげなき梅を鶯のいかにしてか

は望にぬふらむ (第一・正月)

○伊勢物語百廿一段に「昔、男、梅壺より雨に

ぬれて、人のまかり出づるを見て、

(A) ▲ 鶯、の、花、を、縫、ふ、て、ふ、笠、も、が、な、ぬ、る、め、る、人

に著せてかへさん

返し

(B) ▲ 鶯、の、花、を、縫、ふ、て、ふ、笠、は、い、な、お、も、ひ、を、つ

けよほしてかへさんし

という小段がある。男女の意の贈答状で

あるが、さらにいうならは(A)は、催馬楽の

「青柳を片糸に縫りて鶯の縫ふてふ笠は梅の

花、笠、
 を引用したものである。これはまた「
 古今集巻廿に「かへしものうた」^レ（※調子を
 かえる時に歌うもの）として収録されている。
 こういう背景があり、俊頼のこの一首の本
 歌をどこに求めるかといふことになる。俄か
 に決めがたい。しかし、俊頼はこのうちのと
 れかに依っている。ここでは二首とも「伊勢
 物語」に所収されているので一応ここにとり
 あげた。催馬楽の本歌取りの問題が出たので
 歌謡からの本歌取りについて今少しここでと

りあげておこう。

秋邊といえは神楽歌もこれに入る。まず、

催馬楽の本歌取りが今一首ある。例えは、

○くしれぬ涙をくたゐる今すこしのほれといひ

しわたりと思へば (巻六 悲心歌部)

の詞書をみると、山崎近く交りてそのたび

なほの海へ*難波の海のこと)といふ催馬楽をう

たひてのぼくせ給ひし事の思ひ出でられてよ

めるしとある。それは催馬楽なんばのうみ難波海しの

▲難波の海 難波の海 漕ぎもて上る 小

舟大舟

筑紫津までに

今少い上れ

山崎

まてに

の一首であり、明うかに俊頼はこれをお歌

としているのである。人しれぬ涙ぞくだる

は下の句「のぼれ」と対語をなす技法であつ

た。そのほか、神樂歌と本歌としている例に

は、次のようなのがある。

○たちばなの木のまろどのにかほるかほとは

ぬにをりのる物にむありけり(四月)

▲^(奉)朝倉や木のまろ殿に我をれば

(末)

▲我をれば名告りをしつゝゆくは誰。

(これは新古今集巻十七には天智天皇御歌

として所収)

「歌謡」と「和歌」との関係については「無

名抄」に興味ある歌を伝えている。「俊賴歌

傀儡云事」の條に、藤原忠実の邸に俊賴が参

白した日、丁度傀儡どもも参りて神歌、(神

遊びの歌・神樂歌など神事歌謡が今様歌謡と

なつたものの短歌形式には二句神歌がある)

になつて、俊賴の、

(4)

○世の中は憂き身に添へる影をれや思ひす

つれど離れざりけり

散不集集下
雜部下

金葉集入撰
堀川百首
千載集入撰

の歎と謠いだし、俊頼が面目をほいこした

という話である。ついで永縁僧正が琵琶法

師にさまぐ物とらせせて自叙「きくたひに

珍しければ」を謠あせ初音の僧正の名ととり、

またこれを羨やましく思い敦頼入道(道因)

は物もとらせず首どもに自叙と無理に責め謠

あせて世人の笑いを買った話なども出ている。

これらは奉教取りとは逆に俊頼の教が教謄
 化されて傀儡に流された例であり、
 教謄 ↓
 和歌。和歌 ↓ 教謄 といつた両方の現象が当
 時すでに存していたことが知られる。(志田延

義著・「日本歌謡図史」(参照)

また次のような例もある。

○梅が香はおのがかきねをあくがれてまやの

あまりに隙もとむらむ (巻一・正月・千載集入撰)

これは僅馬掣の「東屋」を奉教としたもの

であらう。

▲東家の真屋のあまりのその面そそ
 ぎ我立ち濡れぬ殿戸開かせ
 この催馬楽は男女問答歌の男の歌でそれには
 答えて「^{かまひ}謎も^{きし}謎もあらばこそ^しい^しの女の歌もつ
 づく。内容としては恵の歌謡であり、俊頼の
 歌は「梅が香^しを素材にしたもので直接には
 関係がないが、「まやのあまり^し」の用語上の
 つながりは注意すべきである。

● 物語・私家集からの本歌取り

○ 嵐もや葉字の、神もた、い、る、ら、む、月にもみぢの

手向しつれば (芳三・秋・九月)

▲ かしは本に葉字の、神のましけるを知らで

ぞ折りした、た、た、り、な、さ、る、な、 (大和物語)

▲ かしは本に葉字の、神はまさずとも人なら

すべき宿のこずゑか (源氏物語・柏木)

○ 君をおきてこゝこひするか奥山に水、乞、鳥の、

水こみがごと (第八・忠部下)

▲ 夏の日のもゆる思ひのわびしさに水、乞、鳥、

の、ねをのみむなく (伊勢集)

○ 秋の田の刈るほどもなくかへされて思ひも

あへぬねに、むそほつる (第八忠部下)

▲ ひきとむるものとはなしに逢坂の岡の朽

月のねに、むそほつる (蜻蛉日記)



後拾遺集よりの本歌取り

(1) 五月 雨はふるからその忘れ水おしひたす

らのぬまえとぞみる (第一・五月)

○さま くに思ふ心はある物とおしひたす

らにぬるゝ袖かな (卷十四(志回)・和泉式部)

(2) あはれにもみさをにもゆる蜜かな声たてぬ ツイ

べきこの世と思ふに (第一・五月)

○音もせで思ひにもゆる堂こそ鳴く虫より

も哀なりけれ (巻三・夏・源重之)

(3)

他人の袖はは、その杜なれやし、ぐる、ま、

に、色かはりゆく (巻七・志部上)

○いかなれば同じ時雨に紅葉するは、その

杜、のうすくこからん (巻五・筑下・堀河右大臣 頼宗)

(4)

音羽山もみぢ、散りしく逢坂の園の小川に錦、

おり、かく、 (巻四・冬・十月) (金葉集 入撰)

○嵐吹くみゑるの山のみぢ、は、は、た、た、の

川の錦、なり、けり、 (巻六・冬・能因法師)

「後拾遺」からの本歌取りもさほど多い方
ではない。

さて以上三代集を中心として、その他各種
の歌から後頼の本歌取りの問題を考えた
のであるが、これ以外にもまたあろうかとも
思う。ただいままでを本歌取りとして取扱
てよいかと、いうことになる。なかく、むずか
しい。一応以上のような作品を本歌取りの型
として扱ってみたのである。

やはり、古今集からの本歌取りが最も多い。
 これを万葉集の本歌取りに比べるとすくなくない
 革新の方法を万葉に求めたのは俊賴の特色
 であることはすでに述べた所であるが、それ
 でもまた一方以上見て来た通り、三代集的な
 俊賴の伝統性も忘れてはならない。
 彼の勅撰入集歌二〇五首には伝統的な優美な
 歌が多い。しかし、これと他の金葉集時代の
 歌人にならば、またそこには強力な俊賴の個性
 、新しい気力がみいだされる。それは俊賴の

こうした伝統をしつかりふまえての革新的志向に外ならぬ。金葉集時代の歌壇を生んだものは、そうした伝統に立脚した俊賴の前進的播えの中に胚胎していたのである。

はなし。『四条宮甲斐』等とも唱和している
 し、後拾遺時代にさかのぼる歌人には備中守
 政長・長清律師・孝清・隆成・時房・成元・
 それに俊頼の妻の父敦隆もいる。金葉集歌人
 としては南白忠通の中將時代の連歌、雅光（
 国信の弟）・顯因（国信の子）、安芸守重基、そ
 の他俊連の連歌、唱和の相手は高位高官に限ら
 ず、名もなき僧、女性までいたのである。
 最後に俊頼と俊重父子の唱和、三所六句があ
 るのでこのことについて述べ、まとめたい。

第五章 俊頼と連歌

第一節 平安時代における短連歌

俊頼の連歌を考へる前に平安時代における

短連歌のことについて若干述べてみたい。

伊勢物語 69 段に業平と伊勢の齋宮（文徳天

皇の御女）との間に贈答唱和の一首と二人で完

成させた話がある。

(1) かけ人の渡れど溜れぬえにしあれば（齋宮）

同族の心おかざる連歌であつた故かまこ	した	の	(1)	(3)		(2)		(1)	
	いた	の	は	た	石	う	つ	潮	川
	わ	に	刑	が	山	つ	り	の	尻
	ば	旅	部	う	の	ば	り	ひ	に
	一	出	卿	ち	鏡	り	の	る	船
	族	した	道	な	の	り	下	と	の
	の	た	時	し	声	か	に	て	へ
	旅	時	一	に	こ	け	は	さ	ど
	で	、	俊	高	そ	そ	魚	わ	も
	も	俊	頼	く	き	こ	や	ぐ	見
あ	重	の	な	こ	に	す	な	ゆ	
つ	を	兄	る	ゆ	み	ま	る	る	
た	つ	一	ら	な	え	ざ	ら	む	
た	れ	潮	む	れ	つ	ら	む	む	
故	て	湯	((((((
か	同	浴	重	頼	重	頼	重	頼	
、	行	に))))))	
ま		津							
こ									

あ る。 ま た 大 和 物 誌 128 段 に は 筑 紫 の 遊 女	完 成 さ せ て い ろ そ の こ と に 実 は 大 切 な 意 味 が	ま い が と い か く も 一 首 の 歌 を こ の 様 な 形 で	は 連 歌 と い う も の を 意 識 し て い た の で は あ る	し の で あ ろ う 。む ろ ん こ の 場 合 ニ 人 の 内 に	平 安 朝 に お け る 連 歌 の 文 献 と し て は 最 も 古 い	尾 張 の 回 へ 旅 立 つ た と い う の で あ る。 こ れ は	は 続 ^つ 松 ^{まつ} の 炭 で (2) の 末 句 を そ の 皿 に か き つ い で	(1) は 盃 の 皿 に 上 句 だ け を 書 い て い た の を 業 平	(2) ま た あ ふ 坂 の 南 は こ え な ん (業 平)
--	--	---	--	---	--	--	--	--	---

とに諧謔的な唱和になつてしまつた。川尻

しからの連想で「船のへしは「屁に掛けた

面白さがその中心である。俊重もそれを承け

て船のひしめいてゐるのは潮の干るためであ

ると見たて「屁をひる、しに掛けて笑ひ興じた

のである。連歌における俳諧精神の萌芽など

もこうしたところに見え始め、和歌の世界で

は到底出来なないま当である。

(2) は、「つり殿しに付して「うつばりし(梁)

を以てし、「うつばりしには同時に「つりばり、

歌人 松垣の御が下句起しともみるべき

(1) わだつみの中にぞ立てるさを底は

の歌の末句に討して

(2) 秋の山辺やそこに見ゆらむ (松垣の御)

とみごとくに附けて (1) の難問を解決した話が

る。 佐じく 168 段には有名な

(1) 人心うしみつ今は頼まじよ (女)

(2) 夢にみゆやとねむ過ぎにける (良岑宗貞)

の唱和がある。 (拾遺集・十八巻にも収録)

「俊頼髓」には「連歌」こそ世の末にも昔に

た	た	石	に	ば	の	伴	(3)	か	を
の	の	山	作	、	暮	な	は	け	を
で	を	寺	ろ	く	れ	つ	は	け	を
あ	復	の	う	、	が	て	、	る	を
ろ	重	の	と	ち	た	下	、	言	を
う	は	方	し	す	に	つ	後	語	の
。	、	か	た	さ	石	た	頼	の	扱
下	こ	ら	の	び	山	時	が	法	を
句	れ	聞	で	に	の	の	亡	を	面
の	を	え	は	し	か	連	き	白	白
面	連	て	あ	と	た	歌	文	さ	さ
白	歌	く	る	あ	に	で	経	の	は
さ	に	る	ま	る	鐘	詞	信	の	、
は	き	鐘	い	か	の	書	の	中	う
、	き	に	。	ら	声	に	田	心	ち
う	な	ふ		連	の	よ	上	と	な
ち	し	と		歌	の	れ	ヶ	し	な
な	て	口		を	聞	ば	社	て	ら
ら	附	吟		意	え	「	に	い	す
す	け	し		識	け	日	後	る	
				的	れ		重	。	
							を		

おとらず見ゆるしのなれ。昔もありけふをき
きおかざりけるにやしとそこの古い文献に少な
いことを述べて、俊頼自身は古今集時代以降の
連歌90句（45聯）の例をあげている。その中に
は古今集時代のものとして

奥山に船こぐ音のきこゆるは（躬恒）
なれる木の實やうみわたるうむ（貫之）

なほいしのたえぬ所にかつらばし（忠孝）
つかひのをきに壬生のただみね（敏行）

こゝに「般若」(一) 古代の楽番(一) を掛
 けて答えたのである。夕暮れ時石山寺からひ
 びいてくる鐘の音を亡き経信の田上社におい
 て静かに聞いてゐる俊頼父子の姿が浮かんで
 くる。石山寺という背景の故に、連歌として
 は珍らしく和歌的情景である。
 以上、散木集における連歌の様相を主とし
 て俊頼を回る人達を中心に述べてきた。まだ
 この外にも多くの作品があるが、佳作と思わ
 れるものを摘録してその内容につき検討して

の四句をあげていゝ。

以上の諸例でも明らかかな通り難問に對して

当意即妙の機智を以てみごとく解決する答を

詠むといふことが短連歌制作上の必須の條件

であつた。いわゆる機智回答といふ形で前句

と都合よく處理し得るのが連歌の名手であつ

たわけである。もとく連歌発生の場が総じ

て男女の意の掛け合ひであつたのが漸次「謎

問答」に近い遊びの場に發展したことにつ

ては柳田國男氏や折口信夫博士など民俗学畑

きた。
さて、短連叙の性質は、これまで見て来た通り、和叙と異なりすべて機智（同時に奇智でもある）・問答・寓意即妙の対応の中に形成される。それでは、その機智問答はいかにして成立するのか。むしろ、それは新奇な着想による前句と附句との承応の中に成立し、その根元は着想（心）にあるのは当然であるが、それだけでは解決しない。そこで問題になつてくるのは、その着想の表現化といふこと

の学者達がすでに論じてきた大きな業績であ
 った。このことの経緯については最近(注・(1))島津忠
 夫氏も論文されていゝる。
 「謎問答」の例として「かげろふの日記」の中
 に道網の母と時姫とが「葵のまつり」における車
 競いの事である。どみ合つた時の連歌がある。
 (1) あふいとかきけどもよそに橘の(道網母)
 (2) きみがつらさを今日こそはみれ(時姫)
 この唱和に於て(1)の「葵」には「逢ふ日」をか
 け、「立ち」に「たちばな」を言いかけて難問を提出

と^〇ば^〇の技法・運用が短連歌の唱和の場合には
 実に重要な契機を作るといふことである。長
 連歌との大きな相違もここに由来する。
 そこで、筆者は機智頓才といふ短連歌の基
 底を(一)、着想(心)と(二)、表現(詞)に大別
 しその大半以上は着想といふ内容面に支えら
 れつゝも表現といふ言語の問題に帰する結論
 を得た。今これを散木集短連歌54聯(108句)
 (但し、隆源前句欠と俊頼の唱和一聯を除い
 た数)を分析してみると次の表の様になる。

的俳諧精神の萌芽と説明されて
 いる。この三
 に附けている。この句を川口久雄氏は「犬筑波
 とやいはざりし」と極めて傍観的態度で巧妙
 (3) くひつぶしつべき心ちこそれ
 がつて、さらに橋の果をうけて
 いるのである。この贈答をきいた弟家は面白
 った返答になつて一種の謎問答が形成されて
 して詠み込んではいるといつたなか
 かけ、さらに「君がつらさには「かづら」を物名と
 したのに対し時姪も負けず「君」に橋の「黄実」を

				着 (心)想				基 底	
表 (詞)現									
緣 語	疊語 同音	對句的 表現	掛 詞	擬 人	諷 刺	諧 謔	難 問	矛 盾	要 素
一 聯 (2句)	九 聯 (18句)	二 聯 (22句)	二 〇 聯 (40句)	一 聯 (2句)	二 聯 (4句)	三 聯 (6句)	三 聯 (6句)	四 聯 (8句)	句 數
四 十 一 聯 (82句)				十 三 聯 (26句)				計	

の	・	納言		例	な	な	に	技	句
和	江	言	さ	で	言	な	重	巧	に
家	家	物	て	あ	語	つ	な	な	み
集	次	話	、	る	遊	て	り	ど	る
に	弟	・	こ	。	戯	い	合	の	掛
し	孝	和	の		と	っ	っ	俳	け
か	に	泉	外		し	て	て	諧	合
な	連	式	に		て	の	内	精	い
り	歌	部	も		の	性	包	神	連
の	の	日	枕		格	を	さ	と	歌
連	こ	記	草		を	考	れ	も	に
歌	と	・		含	え	て	み	施	
が	ほ	更	・		む	る	い	よ	こ
散	は	科	落		注	上	る	り	は
見	見	日	窪		意	に	複	要	謎
出	え	記	窪		す	は	雑	素	問
来	、	・	物		べ	極	な	が	答
る	後	学	話		き	め	内	同	・
。	頼	草	・		事	て	容	時	物
	以	物	堤				と		名
	前		中						

右の表の通り短連歌における機智は、その
 着想の大方は詞の技法に支えられてい
 る場合
 が約三倍に相当している。着想の要素は予省
 ・難問・諧謔など多く、表現技法の要素とし
 ては、掛詞によるものが最も多く、対句的表
 現・畳語同音・縁語の順になる。さて、この
 様に着想・表現に大別したのであるが、この
 二者が全く別々に存しているのではない
 場合も混じり合っている。この場合、心・詞
 の場合は、心・詞いずれとも混じり合っ
 て機智は発現される。このことはまた着想の要素

(西本願寺本躬恒集・清慎公集・義孝集・公
 忠集・忠慶法師集・相模集・西本願寺本育宮
 女御集・弁乳母集・康資王母集・清少納言集
 ・松垣姫集・朝光集・実方集・赤染衛門集・
 小大君集・重之集・公任集・実頼集・馬内侍
 集・和泉式部集・伊勢大輔集・出羽弁集等)
 これらの集の歌人達は作歌がその中心では
 あつたろうが、一方に於ては社交の場には歌
 のみでは味わい得ない連歌とある機には言詠
 の遊戯として打ち興じたことであらう。とく

相互の間、表現の要素相互の間にあつても関
係し合つてゐるのであり、孤立してゐる場合
はほとんどない。ここに取りあげた要素は、
その中から特に作者同志が意識的に配慮した
機智を抜き出して整理した表である。このこ
とは、散木集の短連歌のみでなく、その他の
作品についてとも言えることである。

にこの中で実方集には26句という多くの連歌
を収録してゐる。数奇を好まれた花山院と親
交のあつた実方がかくも多くの連歌の唱和を
試みてゐることは連歌史上注意すべきことで
ある。これらの短連歌の内容をみればさまざ
で表の句、難問即答、機智問答、謎々問答ま
で短連歌は生きて流動發展してゆく。短連歌
といふものは歌人相互の二首唱和の贈答歌と
は全く別な世學に形成された即興機智頓才の
詩であつた所にその特色があり、そこで和

第三節 俊頼の連歌観と

金葉集の連歌

以上俊頼の作品について述べてきたが、それでは彼自身、連歌についてどのような考えをもつていたかについて述べてみたい。俊頼は連歌のことについて、

「次に連歌といへるものあり。例の歌のなからをいふなり。本来心にまかすべし。そのなかからがうち、いふべき事の心をいれ

歌的情趣は全く絶縁される。そして、それは

院政期における俊頼の金葉集時代を以て完成

された。その中心に俊頼がいる。彼はこれま

での短連歌を自分でたぐりよせ、遂に勅撰集

の場に連歌という呼称をはつきり定位させた

。それが金葉集の連歌38句であった。

二條良基は

「……かやうの事ども次第に多うなりて、拾

遺、金葉などよりは勅撰に入り侍るなり。

されど、たい一句づ、言ひ捨てるほかかり

はつるなり。心のこりて、つくる人にい
はてさずるはわろしとす。例へば、夏の夜
をみじかきものといひそめしと、いひて、人
は物をや思はぶりけむと末に言はせむはわ
ろし。此歌を連歌にせむ時は、夏の夜をみ
じかきものと思ふかなといふべきなり。さ
てぞかなふべき一俊頼髓腦一
と言つて例の万葉集の「佐保川の水をせきあ
げて植ゑし田を」つかるわせいひはひとりな
るべししを始めとして、「白露の奥にあまた

にて、五十句百句などに及ぶ事はなかり
きし。(筑波問答)
と連歌が勅撰集に入集した事と短連歌の性
質について述べている。事實、拾遺集巻十八
には六所(十二句)を収録しているが連歌の部
はまた設置していなかつた。俊頼になつて始
めて金葉集巻十に連歌の部を新設したのであ
る。これは連歌史上における画期的な前進で
あり、連歌と和歌と同列の位置にまで引きあ
げ、しかも勅撰集という晴の舞台に於て脚光

の声すなり。一「花のいろくありとしらなむ
 し（後撰）一「ひと心うしみつゝ。一（拾遺抄
 ・（^{葉節}既出）一の三聯を例示している。後の二聯に
 ついては「あゝかなへり」と言つているか、
 万葉の頭句については「よもわろからじと思
 へど心残りて末につけあらはせり。如何なる
 事にか」と評している。「そのなかからかうち
 に。し」という考えを持つていた後頼が万葉
 の頭句について批判をしたのは当然のことと
 あつたらう。

を浴びせたのである。長連歌がやがて中世の詩として発展したのは中世連歌師達の努力に負うところが大であつたのはいうまでもないがその源流に敦人俊頼のいたこととを忘れてはならぬ。

第二節

俊頼の連歌

それでは、俊頼自身の連歌はどうであつたか。俊頼をめぐるグループの唱和を中心に考えてみよう。

こうした前句に言ひのこした例は万葉集の
この句のみではなく、「かぢ人の渡れど濡れ
ぬえにしあれば」（伊勢物語）「わだつみの
中にぞ立てるさを鹿は」（檜垣姫集）「あふ
ひかと聞けどもよそにたちばなの」（蜻蛉日
記）などいずれもそうであり、その下句を附
ける人に完成させようとする要求が必ずにあ
つたためこのような未完の形のまま投げ出さ
れたのである。このことは、連歌の発生経路
から言つてむしろ自然であり、また連歌が独

彼の私家集「散木集」には全部で110句へ55
聯の多くの短連歌を収めているから俊賴の連
歌の実態はこれによつてつかめる。こゝまで
の平安朝の私家集を見た目でこの散木集をみ
ると連歌の原野が急に展げてきた思ひがする。
そこを流れてやまぬ俊賴連歌の水域はこれま
での連歌の合流された豊富な水量を汲みあげ
る感を抱くのである。そこには俊賴をめぐつ
て唱歌のメンバーがフギ／＼に登場してくる。
まず堀河院が登場する。堀河院歌壇と俊賴

立してゐなかつたことを示すものである。し
 かし、これが平安朝中期に至ると上句に於て
 も独立した形態が多くなつて来るのであつて
 俊頼の時代には、すつかり独立性を獲得して
 くる。俊頼が、「夏の夜を短かきものといひ
 せめし」を連歌にする時は「夏の夜を短かき
 ものと思ふかな」といふべきであると言つた
 のは、短連歌における上句の独立性宣言に外
 ならぬ。「歌木集」「金葉集」には上句未完
 の作品は一句も収録してゐない。「今鏡」の

に
つ
い
て
は
す
で
に
述
べ
て
き
た
の
で
こ
こ
で
は
連

歌
を
中
心
に
考
え
る。

歌
人
堀
河
院
も
連
歌
に
興
味
を
も
た
な
か
た。
或
る

日
弘
徽
殿
に
お
た
り
そ
こ
で
「
く
ろ
を
と
こ
」
と
い
う
笛

吹
き
の
声
を
き
き

(1)
く
ろ
を
と
こ
く
ろ
と
の
程
に
音
す
な
り
(御製)
ひ
こ
の
し
ろ
ぬ
し
ゆ
き
さ
だ
が
ぬ
る
(俊頼)

の
唱
和
を
試
み
た。
院
は
「
く
ろ
を
と
こ
」
と
い
う
笛

の
名
手
が
黒
戸
(清
涼
殿
の
北
の
間)
の
あ
た
り
で
笛

を
吹
い
て
い
る
と
い
う
く
ろ
の
同
音
の
面
白
さ
を
中

作者は、金葉集の連歌にふれて、

「歌の風情、いたづらに薄る事なりとて、

連歌はおほかたせられざりけりと聞え侍り

しに、金葉集にぞいとしもなき多く集めら

れ侍るめる。いたづらに出で来たるを惜し

ま水侍りけるなるべし。」

と言つてゐる。ここには三つの問題が含まれ

てゐる。(1)連歌と和歌とが風情の上から異な

つてゐる事の意味。(2)俊賴は歌人であつたか

ら連歌はしなだらうと推測したこと。(3)と

ころが金葉集には大した作品でもない多くの
 連歌を集めていゝ。つまらぬながら作られた
 ものは惜しまれたのだらう。という金葉集連
 歌に對する不信の表明。このような考えは連
 歌に對する当時一般の人達の考え方であつた
 ろう。歌人でも特に機智的なものに関心を持
 った者のみかこれに興じたであらう。しかし
 今鏡の作者の言うように金葉集連歌は決し
 てつまらぬものではなかつた。俊賴にしてみ
 れば連歌という名を始めて設けて勅撰集の晴

にも雲[〚]の上[〚]に雲[〚]の上[〚]人[〚]と同音[〚]を重ね[〚]たの[〚]に[〚]対[〚]
 し俊頼[〚]が下侍[〚]へ清涼殿[〚]の南[〚]にある侍臣[〚]の詰所[〚]
 に侍[〚]め[〚]つていてくれよ[〚]と同じく同音[〚]をふ[〚]んで
 対応[〚]させた言語[〚]の遊戯[〚]がみ[〚]られる。今鏡[〚]の筆[〚]
 者が俊頼[〚]の下句[〚]につ[〚]いて「詞[〚]はとゞこほり[〚]た
 りと聞[〚]ゆれど、心[〚]はさもある事[〚]と聞[〚]ゆめりし。
 と評[〚]したのは、歌[〚]の[〚]コトバ[〚]と風情[〚]に馴[〚]れた目
 から見た連歌[〚]の表現[〚]上の相違[〚]を指[〚]摘[〚]したも[〚]の
 で当時の人々[〚]の連歌[〚]観[〚]がう[〚]かがわ[〚]れる。

の舞台に堂々と登場させたのだからこの事に
ついては慎重に構えたに違いない。さて、俊
頼は「俊頼髓脳」の中にも多くの連歌を収録
している。その中で金葉集に採用したのが十
四聯（28句）である。金葉集全句数十九聯の
中に十四聯まで「俊頼髓脳」から採用してい
るからその比は大きい。いわば「俊頼髓脳」
は「金葉集連歌」提供の材量の豊庫であつた
わけである。そこで以下函書の重複句となつ
た金葉集の短連歌についてその内容を検討し

(3)

外記はおもひの外にまゐれど (俊頼)
内侍こそ支度の内を出でにけれ (御製)

これは院が内侍所へ考られた時、内侍が

でに退出されていったので詠んだもの。この唱

和は「内侍」に「外記」、「支度の内」に「思ひの外」出づ

るに「参る」などすべて対句的表現のみ。典型的

短連歌でこの種の表現は後にも多く出てくる。

院との唱和は以上三句。最も多いのは仲実

との唱和子句である。散木集をみると仲実と

俊頼はこれに親交を持っていたようである。俊頼は

てみよう。この類別方法についても、先の散木集の場合と同様、金葉集連歌の場合でも機智頓才の妙味はその着想にあることは勿論だが、表現化という詞に關係する技法の多かつた結論を得たことをまず指摘しておこう。

(一) 掛詞を用いた作品

しめの内にきねの音こそ聞ゆな水 (神主成助)

いかなる神のつくにかあらむ (行重)

この句には一加茂の御社にて物つく音のし

仲実には牛を借りたり、仲実の新しく作った琴

をひき鳴らしたり、正月には仲実には七草の菜

を贈つたり公的な交際ばかりでなく私的な交

誼の中にお互いの温い心を通わし合っている。

わづかに狐坂にきたれり (仲実)

こうくといひけるしるべ走らせて (俊頼)

白妙にしれてもみゆる男かな (仲)

腹くろしとは名を得たれども (俊)

今日の事かたなしにてぞおしはかる (仲)

南のところにかゝらむとは (俊)

けるを聞きてしと、
誦書がある。『神社の
注連（しめ）の中に杵（神職たる宜禰に掛け
る）の音がきこえる。』に對して、その杵を承
けて、『ソかなる神の搗くのであろうか』と附
けたのであり、搗くにはさらには憑くをも掛け
たところに面白さがある。

ちはやぶる神をば足にまくものか（神主）
これをぞしものやしろとはいふ（和泉式部）

これも加茂関係の連歌で、和泉式部が加茂
に詣でてわらぐつに足をくわれた時の作。

(4) 今日見れば山の女ぞ遊びける (仲)
 野のおきなをぞ遣らむと思ふに (俊)

(1) は仲実木ある時北山の辺に行つた時道

案内の者が遂に来なかつたので「やつとのこと

で狐坂に来た」といふ「来つ」に「きつね」をかりて

下句起しで詠んだのに対して俊頼は「こゝ」

という狐の鳴き声を「来」に「か」けて「それ

を道しるべとしてやつとのこと馬を走らせ

来たと忖酬したところには面白さがある。

(2) は「仲実朝臣のもとにて役する侍のものを

こぼしたりければ、
 着物にものがこぼれていかにまぬけた風に
 みえる男だと揶揄したものだろ。同音をふ
 んでいるのも技巧的。それに射して「腹黒いこ
 とでは有名であるけれど」とつけて「しろたへに
 「腹ぐるし」との射比を中心にあしらった。
 (3) は、ある人が僧に夜食をふるまつた時特
 別に固い梨があつたのでそれを「かたなし」と
 いう不首尾に終る意にかけ「今日の事はこの
 固梨のようにすべてが台なしになつてしまつ

「もったいな。神（紙）を足などにまくも

のがあるか。しに對して「足にまく紙（神）だ

からこそ下の社（下加茂）というものです」

と式部は答えた。足が人体の下にある所から

「下の社」という掛合は全く妙技を得ている。

かも川を渡るは、ぎにても渡るかな（頼綱）

かり袴をばをしと思ひて

（信綱）

これは水量を増した加茂川を渡り男をみて

の着想で「加茂川を渡るは、ぎ（紙をかきあげて脛

を出して、り姿）で渡っているよ。」鴨（加茂）

たと言つたのである。それに対応して俊頼は「
方角なし」とうけとり南とし、同時に「皆見」にか
けた複雑な技巧になつてゐるのがこの唱和の
ねらいである。

(4) は、「山女をみて」と詞書にあり、山女とは
「あけび」の異名でそれに府して「野老」と
ろろいもの異名たる「野のおきな」を配し
て答えた機智が中心。俊頼の附句は耳か
面白。以上8句とも仲実と俊頼との連歌は
すべてコトバの遊戯的やりとりの興味に終始

の縁から鷗を掛けた所に面白みがあり、それをうけて「借りた袴を惜しい」と思つて「とみたて「借り」に「雁」を掛け、「惜し」に「鴛鴦」をかけたところまたその承応は凡でない。すべて掛詞によつて構成された秀句である。

(二) 対句的表現の作品

あづま人の声こそ北に聞ゆなれ (永成師)
みちの国よりこしにやあらむ (慶範師)

この連歌は、すべて対句的構成によるもの

してゐる。ほんの一寸した平凡な機をとらえ
 二人は面白く連歌にうち興じてゐるのである
 。総じて短連歌は何の他愛もない場において
 取り交わされる所に歌ではみられないおかし
 みがある。無心連歌と後世で呼ばれたのもこ
 うした要素の含まれてのことであらう。
 仲実 は「堀河院歌壇」の推進者として国信、俊
 頼と共に重要なメンバーの一人として俊頼と
 同座した歌合も多く金葉集には仲実の歌を四
 首入集させてゐる。

で「あづま」に對して「みちの國」、「北」に

對して「越」。さらには「來し」を

掛けてゐる技法など對句のやりとりは終始し

詞書の「北」の方に声なまりたる人の物ゝひけ

るを聞ききて「ふさわしい連歌にしてゐる。

桃園の桃の花こそ咲きにけり
 梅津の梅は散りやしぬらむ
 (頼經法師)
 (公資朝臣)

この句はさらにはつきりした對句表現であ

り、同音まで夫々の句に置いて機智の承応を

なしてゐる。

次に多いのは隆源阿闍梨、承源法師、肥後らと交わした6句（三所）である。（但しこのうち隆源とは8句交わされていゝるが、内一句隆源の前句欠になつていゝる）次にその主な句をあげてみよう。

○ 隆源阿闍梨と俊頼

(1)

かきねにはいたちはじかみはえてけり
 ねずもちのきよ心して咲け
 (隆)
 (俊)

(2)

長如来基をりやくもしけるかな
 天王寺なる凡夫には負く
 (隆)
 (俊)

智 の 主 点 で あ る 。 こ の 対 句 的 表 現 を 能 勢 朝 次	な 技 巧 を 都 合 よ く さ さ ば り て 心 じ て い る の が 機	比 で 「 鹿 毛 」 と 「 影 」 を 掛 け て い る 如 く 複 雑	以 て し 、 「 か げ 」 に は 馬 の 縁 か ら と 黒 と の 対	巧 を ま た う け と め て 「 田 」 に 「 な は し ろ 」 を	「 黒 」 と 「 畔 」 を か け て い る 。 附 句 は そ の 技	問 の 下 句 起 し で も あ る 。 加 う る に 「 く ろ 」 は	こ の 句 も ま た 対 句 を 存 し て い る と 同 時 に 難	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;"> <p>な は し ろ の 水 に ほ か げ と 見 え つ れ ど</p> <p>(法永成)</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>田 に は む 駒 は く ろ に ぞ あ り け る</p> <p>(法永源)</p> </div> </div>
--	---	--	--	--	--	--	---	--

隆源は後拾遺集撰者藤原通俊の甥で六條家の祖顯季とは姻戚関係（隆源の姉は顯季の弟隆忠に嫁す）にあるから歌壇的にその交友も広く散木集によると長治三年中納言重次員の大井川道遠の時には俊頼・顯季・仲実・敦隆らと共に同行している。

(1) は隆源の「いたちはじかみ（山椒の異名）」に対して俊頼は「ねずみち（玉椿の異名）」を以て答えていゝる。いたちとねずみの取合わせは全く巧妙である。
 (2) は長如來といふ碁うちの

氏は短連歌の第三の発展期と指摘している。

(三) 枕詞を用いた作品

日の入るはくれなぬにこそ似たりけれ(観暹法師)
あかねさすとも思ひけるかな(平爲成)

前句は、日の入るのを「紅花」に見たてた

のである。八代集抄に「へそに似たりとなり

と註しているのは面白い。「くれなぬ」をう

けて日の枕詞である。「あかねさす」を用い染

色法の「菫」を差す「意味に変転させている所

に機智の中心がある。

基を見ての作で、僧の隆源は長如來と、
に興味を持つたらしく、これを仙教的に如來
と利益とを結びつけたのに対し、俊頼は「如來
でも天王寺の凡夫には負ける」とこれまた仙教
的用語を配して前句をよく生かした句になつ
てゐる。(1)・(2)とも名詞の附け合いでしかも
そこに言語としての対立關係を取りあげてい
るところに特色をもつてゐるのである。

以上の例は、散木集の連歌分類の場合にも
試みた詞としての表現技法の面から見て来た
のであるが、次は表現とも関係は深いが主と
して着想そのものに主眼をおいた連歌につい
て見よう。ただ散木集に比してその数も少な
く、勅撰集という性質上いずれも整いすぎて
いる。むしろ題材の領域から言っても散木集
の連歌の世界の方が広くて面白い。これは、
和歌の世界でも同じで勅撰集より私家集の方
が親しめると言った関係によく似ている。

○承源法師と俊頼

論義をばみそひしほにぞしたりける (承)

(1) たうそうなりと人はいへども (俊)

(2) ちまきむまは首からきはぞ似たりける (承)

(2) きうりの牛はひき力なし (俊)

承源法師は散木集では連歌のみにならぬ

僧で歌は残してゐない。(1)の面白さは「論義」を

味噌をずる摺木の「れんぎ」に見たて(音韻の連

想から)説教(論義)が味噌も醬(ヒシホ)も一緒

に台なしにされてしまったとからかつたもの

着想としての要素も散木集と変つたものは別
にならゝが予値の提示、謎問答などの句には秀
れたものがある。

(1) 瓦屋の板ぶきにても見ゆるかな
つちくれしや作りそめけむ
(法師が人)
(助成)

(2) 梅の花がさきたるみのむし
雨よりは風吹くなとや思ふらむ
(律師慶暹)
(薬王丸)

(3) 奥なるをもや柱とはいふ
見わたせば内にも戸をばたててけり
(成光)
(法親暹)

(1) は瓦屋(寺の異名)と板ぶきとの予値の

俗に「みそもくそも一緒にする」語意と同じで僧侶らしい前句である。俊賴はそれをうけて「唐僧」を「豆醬」(豆をいって造つたヒシホ)にかけて唐の学僧を豆醬と一緒にしてこれまた揶揄した掛け合いになつているところには面白さがあ
る。これも名詞の対立關係をついた面白味と
言える。(2)はちまきで作つた馬(端午に用い
た小児の玩具)に對してきうりに四本の棒を
さして牛の形にしたものを(盃蘭盆の供物)
配した所にコトバと共に内容の面白さをつい

提示に對して瓦の原料の土、板の木材樽（く
れ）をかけた「土塊」として解答したのであ
る。

(2) も「花笠」と「蓑虫」との矛盾を念む情
景設定に對して「雨」と「風」を以て「才は」

かりの薬王丸がつけたので心有る童だ」とほめ
て法師にしたと「俊頼髓腦」は伝えてゐる。
「連歌物語」ともいふべき一節である。

(3) は難問であると同時に今時謎々問答でもある。
「奥に柱」この柱を「端（はし）」に見た

た連袂である。

○肥後と俊頼

うり船はうみすぎてこそあるりたれ (肥)

(1) 波にふられてみなそこに見ゆ (俊)

雀こそをとこ柱になきぬたる (肥)

(2) きざはしたなくいひやしつゝむ (俊)

肥後にもまた堀河院歌壇を構成する下部メン

バーの重要な女流歌人。師実にはえたので京

極白家肥後とも言い、二條太皇太后令子内

親王に仕えたので二條皇太后宮肥後、その他

てた矛盾の提示で答句は「内の戸」の戸に「
 外へ」と「」を掛けて解決を与えてい
 る。難問という着想が心の内部発想に属して
 りながら、それすら言語の表現技法に面白さ
 の中心を移行している。ここに着想と表現の
 二重構造が短連歌における重要な性格を決定
 するものがある。私のこの稿で言いたいの
 はこの短連歌の二重構造であるというこ
 となのだ。

仕えた人により前斎院肥後、金葉集時代には
皇后寛肥後など攝園家・皇室両方面に關係を
もつ肥後は「堀河院百首」には兩度とも参加し
ち時の有力な歌人たちと同座している。いお
ゆる「二條太皇太后寛」園係の女房歌人の一人で
あつた。彼女もまた連歌に關心があつたとみ
え俊賴とは同じ歌人グループとして私的にも
かなり親交を結んでいたようである。
(1)は堀河院の時の作。瓜船（瓜を二つに切
つた一片が舟の形に似ているよりいう。）

第四節 俊頼と連歌形態

短連歌の形態は上句（5・7・5）が前句となるのが普通であるが、下句起しで始まる句のあることは象知の通りである。

この下句起しの句を散木集に見ると8句ある。すでに前にとりあげた上句だけを整理してみると、

(1) わづかに 狐坂に 来たれり (仲実)

の一句のみであるが、その他は次の通り。

肥後が「船」の縁に熟れすぎていることを
 「海過ぎて」来たと面白く配したのに対して
 、俊頼はこれを受け、さらに縁語として「波
 しを配し、「水底」と「比其處」を掛けて照
 応せしめたのである。二句とも、言語の掛言
 葉と縁語とによる表現技法で応酬しているの
 がその特色。

(2)には、「雀のきざはしの男はしらにゐて
 なくをみて」といふ詞書がある。肥後は、そ
 れをすぎぬ（女）が男柱（男）のところで泣

(6)

さ
も
こ
そ
は
歌
も
う
た
は
ぬ
君
なら
ぬ

遊
び
を
だ
に
も
せ
ぬ
あ
そ
び
か
な

(俊頼)

(孝清)

(5)

の
ぞ
け
ど
も
水
の
底
な
る
景
色
に
て

い
づ
み
の
ひ
る
は
み
え
も
す
る
か
な

(俊頼)

(隆成)

(4)

谷
川
の
心
細
さ
に
か
き
た
え
て

た
き
の
糸
見
に
く
る
人
も
な
し

(俊頼)

(よしのの君)

(3)

さ
も
こ
そ
は
住
の
え
なら
ぬ
よ
と
も
に

あ
ら
う
と
み
れ
は
黒
き
鳥
か
な

(俊頼)

(慈雲房)

(2)

こ
の
実
か
と
か
き
は
ま
ぐ
り
も
き
こ
ゆ
れ
ど

と
り
と
み
つ
る
は
う
さ
ぎ
な
り
け
り

(俊頼)

(六波羅)

いてゐる情暈を雀と男柱（階の端にある柱）との対立連想にみたてたのが中心。それに対して俊頼は「階へきざはし」が「つれなく言つたのではないだろうか」と附けた。「きざはしたなく」に「階」と「はしたなく」を掛けた物名的手法の面白さを以て答えたのである。この附け合もなかく妙を得てよく照応してゐる。

その他句数の少ない作家ではあるが、佳作と思われれるものを若干取りあげてみよう。

ねずみおひにもおひにけるかな
(懐季)

かはほりのすゝたる顔とみゆるまで
(俊頼)

ときははすぎぬいづらかきわく
(帥大納言)

みちすがらまもりさいはいたまふれば
(俊頼)

以上の句であるが、下句起しはすでに

或る発句詠出の作者がその主想・主題を先に

下句形式をとつて詠むために附ける方は善

通の上句起しよりも抵抗が大きく困難が伴な

う。つまり、逆な思考方法をたどることにな

まず国信が登場してくる。

(1)
 をさめどのにはところなしとして (俊)
 へやの象みくららの下にこもるなり (国)

これには「堀河院の御時出納が腹立ちてへ

やの象といふものをみくららの下にこもるをき

きてしといふ詞書があり、大言海に「平安朝

時代 = ハ蔵人所ノシモベヲ、へやのうと言へ

り、散木集 = 見エタリシ。と釈しこの連歌の例

をあげていゝる。散木集の用語から平安朝のこ

とばの資料となつた一例である。

らざるを得ぬ。詞書をみると、(2)は仲実の附

け得なかつたもの。(3)は人々の附け得なかつ

たもので、(8)は政長の代りに附けたといふ様

に上句起しよりも困難な事情が知られる。し

かし、俊頼はこの八句でも分る通りそのいず

れにも冴えた照応をみせている。

ところでは、この下句「 $7 \cdot 7$ 」起しを短歌

と比較してみると全く異なる。それは短歌に

おける下句は上句を承ける関係で完結性が乏

しいといいうことである。連歌に於て「 $7 \cdot 7$ 」の

この句は、その蔵人所出納の役の下司が腹
をたてししもべを蔵の下に閉じ込めたといふ
或る日の出来事のひとこまを詠んだもので、
俊頼の附句もなか／＼気が利いてゐる。その
他對句表現を中心にした作品をあげてみると、

(2)
田笠きて畑に通ふ翁かな
（津守國基）
牛に馬鍬かけたるもあやし
（俊）

(3)
身のうれへ刹那がほども休めばや
（平大進）
須臾も心のなぐさむばかり
（俊）

下句起しのおこったといふことは連歌形態独自の完結性が形成されていふことを意味する。俊賴のいう「いひはつる」とはまさしくこのことに外ならぬ。従つてこの「いひはつる」は短連歌に於ては想・詞ともに大切な条件であり、同時に「本末心にまかすべし」とも言つてゐる通り、唱句は上句でも下句でも自由なのである。ただその数において「下句起しは少ないだけのことである。山田孝雄博士は下句唱和の起原を天曆以後とし、連歌史

(注・44)

さ れ た 境 地 で あ る こ と も 注 意 す べ き で あ ろ う	対 照 と な つ て い る 如 き 和 歌 的 抒 情 と 全 く 絶 縁	↓ 心 の な ぐ さ め 。L。 こ の 句 で は 特 に 漢 語 が そ の	いる。 (3) に は 「 身 の う れ へ ↓ 刹 那 」 と 「 須 臾	↓ 馬 鉄 L は 矛 盾 し た 言 葉 相 互 の 対 句 を な し て	等 が あ る 。 (2) に お い て 「 田 笠 ↓ 畑 」 ・ 「 牛	(5)		(4)	
						の	た	く	高
						き	る	ぼ	畑
						ば	き	田	い
						に	に	も	と
						海	は	か	高
						の	山	く	し
						月	の	や	と
						を	う	く	も
						や	つ	ぼ	見
ど	ば	な	え						
し	り	ら	ぬ						
て	さ	ざ	か						
	し	ら	な						
	て	む	な						
	け								
	り								
	(((
	惹	俊	し						
	雲		よ						
	坊		ら						
)		み						
			ず						
			人						
)						

上第二期とされた。

今、俊頼関係の連歌における唱和実態その他を表すと次の通りである。

実数	重複句数	総句数 (唱和の 倍率)	下句唱和	上句唱和	唱和句数
					関係書
	俊頼髓腦との 金葉集との 重複句 (10句)	90句	10句	35句	俊頼髓腦
		38句	9句	10句	金葉集
	散木集との 金葉集との 重複句 (11句)	108句	8句	46句	散木集
225句		236句	27句	91句	総計

。 (4) は地名の「高知」という所に來ての感慨
 を承けて俊賴は普通名詞の「くぼ田」の感慨
 を以てとりなしたのである。(5) もまた対句表
 現で、たるきに山のうつばり(雉子)をさし
 ているに對し「軒端に海の月(くらげ)を宿
 していると對応させたのであり、たる木に山
 の梁をさすという俊賴の前句は難問であつた
 が、慈雲坊は巧みにこれとさばいた。散木集
 中俊賴の前句は珍らしい。(僅かる句)
 この外にも俊賴は女流歌人として「ゆり

この表で見ると通り、下句起しの比の高いのは金葉集の約 $\frac{1}{2}$ 、俊頼髓腦の約 $\frac{1}{4}$ 、散本集の約 $\frac{1}{7}$ が最も低い。金葉集に下句起しの多いのは勅撰集という性格から俊頼は一方に偏しな
いように配慮したからであろう。

下句起しの作者は、永源法師・為助・源頼光・律師慶暹・成光・頼算法師・よみ人しらずへ3人の九人。(傍線5人は髓腦、と金葉重複の作者)僧侶の多いのが目立つ。拾遺集以降の作者もいる。

遂に勅撰集に自己の名を明らか
 にせず終つ
 はこの一句のみであるのに名を
 憚つた故か、
 としてゐることである。金葉集
 で俊頼の連歌
 こそはしは俊頼であるのに「
 よみ人しらす
 し
 では頼算、法師となつており、
 逆に附句「
 さも
 り、作者名を明らかにして「
 いやいの
 に金葉集
 りけるをみて僧のしたりける
 と「
 うといふ鳥の有
 (3) である。散木集とみると「
 うといふ鳥の有
 集に入集してゐるの
 は先にあげた下句起しの
 ここで注意すべきは散木集から
 只一聯金葉

た。しかし入集させているところからすれば
俊賴自身会心の句であつたにちがいない。
下句唱和は急に起つたものではなく山田博
士の所説の通り、すでに天曆期に開始されて
いる。漸次それは發達して俊賴の金葉集時代
には自由に試みられるよつになつていた。
またこれと関連する連歌の独立性も理論の
みでなく實際の作品にも完全に実施されたの
である。散木集・金葉集の唱句には未完の句
は一句もない。『俊賴髓』には、ただ一聯

まなこゝみのほりかねばかり深ければ (女房)

めもつかとこそあなづられけれ (高倉尼上)

の唱和の例をあげていゝが、これには独立

性がない。

俊頼はこの一駢を説明して「人のやせて目

の深かりければたはぶれてしけるとぞ」と言

つていゝ。おそらく滑稽諧謔といゝいわゆる

着想の面から取りあげた句であらうが形態的

にはいかかと思われ唱和の例である。

これと関連して他にも万葉の有名を (連歌の祖歌)

佐保川の氷をせきあげて植ゑし田を(尾)
刈るわせいひはひとりなるべし(家持)

の例をあげ、
よもわろからじと思へども残
りて末につけあらはせり。
如何なる事にかし。

と批判してゐる。
ところボ次の

(1)
奥山に船こぐ音のきこゆるは(躬恒)
なれるこのみやうみわたるらむ(貫之)

(2)
たれぞこのなるとの浦に立音するは(しよみず)
とまりもとむるあまの釣糸(実方)

肉	た	形	向 ^ㄱ	み	れ	こ	等	(3)	
い	も	式	い	な	ば ^ㄱ	れ	の	は	い
か	の	と	か	か	ㄱ	に	連	ぶ	な
け	で	し	け	つ	万	よ	歌	り	り
と	あ	て	ㄱ	た	葉	る	に	に	山
い	ろ	は	で	も	の	と	つ	よ	ね
う	う	独	附	の	と	ㄱ	い	は	ぎ
内	。	立	句	思	植	は ^ㄱ	て	の	を
容	こ	し	の	わ	ゑ	ㄱ	は	露	た
の	の	て	答	れ	し	で	何	や	づ
面	事	い	え	る	田	終	も	お	ね
か	は	る	を	。	を ^ㄱ	る	批	く	て
ら	言	も	要	そ	ㄱ	前	評	ら	ゆ
も	語	の	求	れ	な	句	し	む	く
問	理	と	は	は	ど	は	て		鳥
題	論	俊	し	お	と	先	い		は
は		頼	て	そ	同	の	な		は
残	ま	は	い	ら	一	ㄱ	い		は
る	た	解	る	う	に	深	な		は
が	は	し	か	く	は	け	い	(信)	(頼)
								綱)	綱)

俊頼は言い切つた句と解していたようである。

また事実、「は」はその他の助詞とはニュアン

スも違うことは確かである。文法的にも「は」

は係助詞で終助詞ではないが、(注15)三矢重松博士

の如く「感嘆を表わすもの」の中に「かな」

「よ」「な」と共に入れているのをみると俊

頼の考えも理解出来る。

以上、筆者は俊頼を中心に金葉集時代を主

とする連歌の着想・表現という問題に焦点を

あててその二重構造性を考えしてきた。そして特に連歌は表現技法に支えられていふことの重要性を分析してきた。これがこの章の骨子で種々な面から考察してきたが究極はここに帰着する。

私的な散本集、公的な金葉集、そして論書としての俊頼髄脳の三書からわれわれは、金葉集時代はもとよりそれ以前からの短連歌の全貌と俊頼の作品、連歌観、選句態度など広く知り得るのである。ことに俊頼髄脳は連歌

の作品史とも言える。この意味から鎖連歌の時代はまた来っていないが、それ以前は俊頼の手で短連歌の様相は明らかになされたのであり、彼の連歌史上の業績は大きい。

(注)

- (1) ・ 短連歌初期の諸相 (『連歌俳諧研究』第二十一号)
- (2) ・ かげろう日記の頭註 (日本古典文学大系本)
- (3) ・ 聯句と連歌
- (4) ・ 連歌及び連歌史
- (5) ・ 高等日本文法

